

日本へ…

UTAブック編

村長野村文次郎
時辰宮里眞秀以下名無名無名無名
叔父松倉正三郎

日本へ
……

はじめに

愛を思う瞑想を続けましょう。田池留吉をただひたすら思える瞑想を続けましょう。私、田池留吉の世界を心に広げていけばいくほどに、あなたの存在も、またあなた自身心で分かってきます。素晴らしい、素晴らしい存在でした。

私達は愛の中でひとつなのだと、あなたの心で一日も早く、少しでも多くの人が自分に目覚めていたいただきたい。私はその思いでいっぱいです。私、田池留吉の世界はただただ愛を伝えます。もちろん、二五〇年後、アルバートとして私はこの日本で伝えた通りに、いいえ、それ以上に私は愛を伝える存在です。私は二五〇年後、アルバートとしての肉を持ちます。「心の中の愛をしつかりと広げていきましょう。」そのように、私は全宇宙に呼び掛けてまいります。心で分かり、心で感じ、心で共鳴し、心で共有していく仲間達が集ってきます。ともに歩みを進めていく仲間です。私はとても幸せです。この日本の国に肉を持ち、学びをしてきたこと、そして素晴らしい仲間と出会えたこと、私の思いは本当に喜び一色です。ともに歩めることを、あなたもそして、あなたもどうぞ、心から心から喜んでいってください。

「私達の中にあるのは愛。心のふるさと、愛へ帰りましょう。」あなたの中に絶えず、絶えず、メッセージを送り続けています。

私は、波動です。愛を流す波動です。波動の中に喜びを、温もりを、広がり、幸せを、本当にひとつになって、心から心から田池留吉、アルバート、愛ある世界を思ってみてください。これから、U T Aの輪を通して、私はさらに愛を伝えてまいります。心の中の愛に目覚めたいけるように、あなたもすっかりとU T Aの輪の中で心を向けていくことをなさっていただく。私達の行く先はひとつ。愛の世界です。行く先と言ってもそれはあなたの外にあるのではありません。あなたの中から、私が伝えていることを、どうぞ、心でしっかりと感じていただく。

(意識の流れ〜田池留吉からのメッセージ15より)

田池留吉にしっかりと心を向けて、あなたの中で意識の流れを感じてください。感じられるあなたになってください。意識の流れを感じていけば、そこにはただただ喜びが嬉しさが広がっていきます。そして、意識の流れを心を感じたとき、特に、私もあなたも、こうして日本の国に今世産まれてきて、田池留吉の意識とともに学んでいるということは、やはり、あなたの中のアマテラスを、喜びに、温もりに、愛に帰すということだったと、それぞれの心でしっかりと知っていくと思います。

もちろん、宇宙に支配力を伸ばしてきた意識、エネルギーは、アマテラスだけではありません。しかし、それぞれの心の中でアマテラスが愛に帰る意識であるという目覚めが、何よりも待たれているんです。その思いが今世、日本の国にあなたを肉を持たせたのです。同時期に、田池留吉の意識が日本の国に肉を持ちました。これは、意識の流れの計画の中で、非常に大きな意味があります。

あなたの中でアマテラスの心を感じてみてください。アマテラスの思いをしっかりと受け取ってください。この学びが日本の国でスタートしたこと、そこには大きな、大きなアマテラスの心が、思いが働いているのです。

私はこよなくアマテラスを愛しています。私はアマテラスの僕しもべでも何でもありません。アマ

テラスとともに存在していける喜びと幸せを感じているから、私達は田池留吉、アルバートとひとつだと伝えることができるんです。アマテラスは忌み嫌うものでもなければ、消し去るものでもありません。アマテラスの心を本当にしっかりと受け止めることによって、大きなそして喜びのパワーを発信していきましょう。

私は、アマテラスとともに歩んでいき、あと一回、地球上において最終地となるアメリカ、ニュージャージーに生まれてきます。こよなく愛したアマテラスの国、日本はもうないけれど、田池留吉、アルバートの肉と再び、出会うことにより、アマテラスの国、日本を思い出し、そこからすべてが始まっていきます。

日本の国からスタートした学び、アメリカの地で一応終了し、次の次元へ移行してまいります。

(UTAの輪の中でも学ぶ141より)

日々、日本各地で世界各地で事件、事故が起こります。自然災害が頻発します。現象界、形ある世界が揺れ、崩れ去っていくことによつて、あるひとつのメッセージを発しています。

正しく受け取ってください。受け取れる私達なんです。肉から意識へ転回していくことが絶対条件です。肉、形の基盤は跡形あとかたもなく崩れ去っていく現象が、次から次へと起こります。次

から次へと起こってくるそれらの現象によって、否いやが応おうでも何かに気付いていくようになっていきます。根底から揺さぶられていくこれからの時間。その時間の中で、何度転生てんしゅうの機会を持つでしょうか。まさに愛の仕事がこれからこの地球上で展開されていくのでしょうか。ともに歩みを、ともにある喜びをというあなたの中の田池留吉からのメッセージをきちんと受けてください。きちんと受けて、きちんと自分と向き合ってください。それが自分に対する愛です。自分に誠実に素直に生きていく生き方が心から待ち望まれています。

(UTAの輪の中でもとにも学ぼう1185より)

田池留吉を思える喜びがあります。アルバートと心を向ける喜びがあります。そして、ともにそうできる、そうしようとする仲間がいます。

こんな幸せはありません。肉に塗れ肉に自分を落とし込め苦しみ続けてきた私達だけれど、本当に幸せの中にあつたことを自分に伝える絶好のチャンスを用意しています。

ともに歩みましょう。ともに歩みを進めてまいります。そして必ず二五〇年後の出会いを果たしてください。

呼び掛けます。呼び掛けます。ともに行こうと。

「懐かしいね、懐かしいね、そう言えばあの時のあなたじゃない？」そんな会話があちらからこちらからも届いて、そして日本という国を思い出します。ともに学んだ仲間だと思い出し、あとはもうすごいスピードで自分の軌道の最終修正に取り掛かることでしょう。

だから、今世、ひと踏ん張り、そしてまたひと踏ん張りです。

田池留吉の意識の世界は、一足早く肉を置き、そして私達を待ち受けてくれています。喜びで喜びでともにある喜びと幸せをあなたも、あなたも、そしてあなたもともに心に広げていこう、そんな思いの世界、波動の世界の中にいざなわれていることを、どうぞ、あなたの心で感じ広げていくてください。

(UTAの輪の中でも学ぼう1245より)





唐古・鍵遺跡史跡公園に復元された楼閣

「日本へ…」

私たち、「UTAの輪」の中で学ぶものにとって、「日本」が、海の底に沈むか、断層帯で引き裂かれ四分五裂するか、破局噴火で溶岩の下に埋没するまいぼつか、いずれにせよ、消滅していく過程の中にあることは自明の理だと思えます。

そのことを前提に、「日本へ…」向ける思いを書き送っていただければと思いません。「…」の中には、言いしれない悔恨かいこんや、感謝や、希望や、喜びや、中には怒りや恐怖の思いもあるかもしれませぬ。

そんな思いを寄せていただけたらと思います。

寄せていただくのは、文章だけでもいいし、できれば写真も送っていただければありがたいです。

(二〇一九年十二月)



平城京跡の建物（奈良県奈良市）

1

学びを始める直前、よく奈良盆地の南の方へ行った。脚が棒になり、スニーカーに穴が開くまで歩いた。大和三山、神社、藤原の宮などの史跡、三輪山とその周辺……。巫女みこの過去世に心を向けるという勉強の頃から、自分はこの辺りと大きく関わっていたんだなと思った。

「大和やまとの国を造ろう、これから日本という国を造ろう、いい国にするんだ、絶対に」。そういう思いが出てきます。「まほろば」の国、日本。これから日本という国を造る時に、沢山の人を抱いた思いじゃないかと思えます。しかしアマテラスの国として存在してきた日本は、結局は競争、戦いで明け暮れてきただけでも知れませんが、そしてその結果、みんな疲弊ひへいしてきたように思えます。「疲れた、平和などなかった……」、そ

う感じます。しかしそれを見させてきたのがこの日本だったのかも知れません。

現在アメリカに住んでいます。他の国も含めると、二〇年海外で過ごしたことになります。今となつては日本に帰りたい思いでいっぱいです。故郷の歌の二番目、「帰っておいで、我が家に……」を聞くと、いつも涙が出てきます。日本、ありがとう、戦いの思いがいかに間違つてきたか教えてくれて。間違つてきた、間違つてきた。来年か再来年、日本に帰る機会が巡つてきました。ありがとうの心と一緒に沈んでいけたらなあ、と思います。

2

日本へ

お母さんのように、温かく静かに私を見守り

受け入れられ続けて許されてきました。ありがとう。ありがとう。幸せな私でした。

真つ黒でおぞましい世界を作り続けて突っ走つてきた。隠すことすらできないそんな私を、私は田池留吉に会うことにかけて生まれてきたと知りました。どうする事もできないそんな私ですが、無条件でただ受け入れてくれる自然を優しいなあと感じてきました。心が潰れていると感じたことも多々ありましたが、日本の自然の中に癒いよされました。

間違つた苦しい心を見つめることを教わつて自分を知つていく事が、冷たい私の心を徐々に温かく変えていきました。日本の自然の中に置かれていた自分を、こんなに幸せだったんだとつくづく思います。ここに生まれることができてよかった。どんなに苦しい世界でもよかったです。苦しいからこそよかったです。ありがとうでした。お母さんのように包まれて、お母さんのように

わがままをぶつける私をすべて受け入れていた
だきました。日本の地よ、ありがとう。本当に
ありがとうございます。この幸せな計らいを私
は二五〇年後に繋いでいきます。必ず繋いでい
きます。ありがとうございました。日本よ、私
は幸せです。ありがとうございました。

3

私は韓国人。物心ついたときから、この思い
と共に過ごしてきた。貧しい中、友達と言って
もいつも比較し、うらやましい、憎らしい、負
けるものか、優越感、そしてひた隠しにしてい
る劣等感。

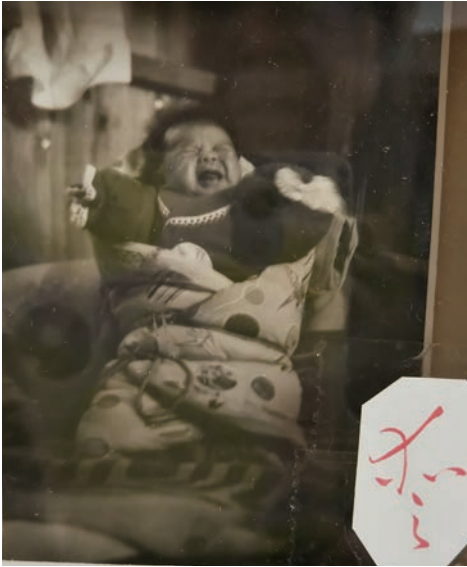
いつも闘っていた。そして頑張っていた小中
学生時代。誰にも心の内を語らず、そう、母にも
自分を見殺しにした者と位置づけてきた母へは、

静かに、けれど絶対に崩さない壁を作った。心
の壁。四人兄弟の第三子である私を貧しいから
と、墮胎だたいしようと思つたけれど、姑に止められ
て生んだと聞かされ、恨みを募らせてきた。ど
れほど私に詫わびて自分を責めてきたのかと、言
葉がない。してもらっていないことなど、どれ
ほど思い返してもない。おもちゃを買ってもら
えなかったと、どうでもいいことを重箱じゆうばこの隅すみを
突つつきまわしてきた私。自由にありのまま育
ててもらってきた。

学まなびに繋がり、数々の残酷ざんげんやくな目にあつた自分
を心で思い出し、その全てを今世の母にぶつけ
てきた私の半世紀です。生贄いけにえの数々、それにま
つわる日本中の地。二上山、生駒、琵琶湖、飛
騨山脈、打っていたらここもここも出てきま
す。その全てが己の間違いに端を発しているの
に。神仏が大好きで、アマテラスそのものの自分。
大阪、富田林に生まれ、五年間だけいた八尾市、

そして志摩市。すべての地が私の二五〇年にながっている場所。何という計画。学びの進捗度、度返しのシナリオに肉の私は驚き、ありがたさ、けれど、計画に自分がついていけるのかと自信の無さで、気後れしている。

小学生の時思った。「日本って、地球の中ではとても小さいのに、なんて特別なんだろう……」大切な大切な国だからだった。



4

はい、私は「日本へ」の意識です。ただただありがとう、ありがとう、ありがとうの溢れる喜びが日本への思いです。私はあなた、あなたは私、ひとつと、日本と私、アマテラスが呼応します。日本は、私に心を向けないでほしいという私の切なる思いを受け入れてくれました。心の外に天照大神あまてらすおみかみを祀り、私は天の岩戸あまのいわとに隠れました。あーあ、あーあ、なんと有り難かったことか。そして、今世、初めて母なる宇宙が田池留吉というひとつの肉を持たせたのも日本でした。天の岩戸に成り果てた私をただただ母のぬくもりで溶かしてくれました。おー、おー、おーと雄叫びおたけが噴き上がります。これから先、心閉ざした私を生かし続けてくれた暗黒の宇宙を、核と心ひとつにして崩して参ります。即ち、日本が沈んで参ります。何も無い、ただただ田池

留吉、アルバート、溢れる喜び、ぬくもりの波動が自分自身だと知ったのだから……。喜びだけで沈めて参ります。はい、喜びだけで沈んで参りますと日本からも呼応して参りました。ありがとう、ありがとうございます、田池留吉、アルバート。

5

今世、この日本に生まれてきたこと、
産んでいただいたということ、

肉を持たせていただいたということ、

思いを向けると、

うれしい。ありがとう。お母さん、ありがとう。

ありがとうございます。

本当にうれしい。ありがとうございます。

ずっと、ずっと苦しかった。

どうしようもなく苦しかった。苦しんで、苦しんで、喚き散らして生きてきた。

何で思い通りにならない。何で私だけ、こんなに苦しい。

わからない。わからない。わからない。わからない。なぜ、こんなに苦しいのかわからない。

そう喚き散らして、欲のままに他力を求めました。

苦しかった。苦しかった。

幸せそうな人が、羨ましかった。

なぜ、あんならんだらう。なぜ、あんなふうになんかそうにできるんだらう。

いろんなものに憧れて、ああなりたい。こうなりたい。ああなれば幸せになれる。こうなれば幸せになれる。あの人のようにすれば幸せになれるだらうと他力を膨らませました。

結婚も打算だらけ。

欲と金。これで一生食べさせてもらえらるうと思っていました。この人と結婚すれば、お金には困らないだろうという打算がありました。

全て、ひっくり返されました。

欲で、求めたものは、全て、違うという、結果をもらいました。

肉の人生は、五十四年ほどですが、

今世、この日本の国に産んでいただいて

「あなたは、愛です」と教えて頂きました。

「あなたは、肉ではありません。あなたは、愛です。エネルギーです。波動です。意識です」と。

田池留吉を思う喜びを教えてくださいました。

肉持つ時間は、あつと言う間ですが、

今世の千載一遇せんざいいつちぐうのチャンスを私は決して逃し

ません。

必ず、愛に帰る道を歩きます。

その道に出会わせていただいた。

ただ、それだけで感謝です。

日本……に、思いを向けると

恐怖が湧き起こってきます。

すごい恐怖。恐怖。恐怖。恐怖の坩堝るっぼ。

恐怖です。

すべてが沈んでいきます。

悲しいです。寂しいです。

哀あわれです。愚かです。

最後の最後までしがみつきます。

ただただしがみつきます。

欲で膨らませてきた我一番の宇宙。

それが変わっていくことに恐怖を感じます。

哀れです。しがみつく心が哀れです。

たくさんの助けてください。救ってください。
なんとかなんとかの念を感じます。生きて地獄
の世界。生きても死んでも地獄の世界が広がる
のを感じます。

みんな欲欲で欲で群がりります。

助けを救いを求めて、祝詞をあげ、教祖のよ
うな存在もたくさん出現します。

何が本当のことか、何を信じたらいいいのか、
みんな、誰も分からなくなつて混乱が続きます。

今まで以上に、欲が膨らみます。

みんな、助かりたいのです。救われたいのです。
祈りのエネルギーが充満します。

恐怖の坩堝むっぼの中、一筋の救いがあります。

田池留吉を思うことです。

心を見るということです。

自分の中に帰っていくということ。

愛が、とうとうと流れていることを恐怖の渦うず
の中で確認できます。

私たちは、みんな愛だったと本当のことに気
づく一步を踏み出します。

地球は、大きくその姿を変えていくでしょう。

でも、もう、私たち意識の流れは、とまりま
せん。

ただ、すべての意識に働きかけ、ただただ愛
に帰ろうと流れていきます。

私たちにできることは、ただその愛を受けて
いくことだけです。

なぜならば、私たちは、愛だからです。

お母さん、ありがとう。産んでくださつてあ

りがとう。

私たちは、肉ではなかった。

私たちは、意識。永遠、無限、波動、愛のエネルギーでした。

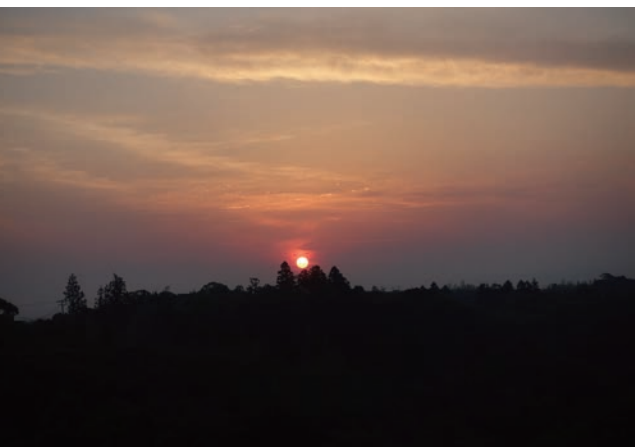
私たちの喜びの瞬間が待っています。

6

日本が大好きで大嫌いでした。

海外に出たのは日本を捨てたというより、外から日本という国を見てみたかったのです。

「故郷は遠きにありて思うもの」という詩に若い頃から憧れていました。私にとつて人生は旅であり、故郷は異郷にて恋しく思うものでした。日本を離れ、海外で生活をする時間が長



くなればなるほどに日本が恋しく、日本人であることを心から誇りに思う場面にたくさん出会いました。

「如何にいます父母、つつがなしや友がき」という故郷の歌詞の中のフレーズを思う度、望郷の思いで涙していました。永住？ 帰国？ 揺れる中、流れに身を任せるうちに気がつけば日本に戻っていました。

日本列島を思い瞑想をすれば、学びはここから始まったという事実だけがクローズアップされます。

日本に生まれ日本を離れ、そして最後は日本でこの肉を終えるというシナリオ。日本よ、ありがとう！ 待っていてくれたことにありがとうしかありません。

そこでコロナウイルスならぬ、天然痘ウイルスと日本人のかかわりを、その始原にかえて、ざっと見ておくことにしましょう。

天平五年（733）、第十回遣唐使が、唐の都「長安」に旅立ちました。この船には、将来「鑑真」^{かんじん}を連れて帰る、留学生「栄叡」^{るがくしやう ようえい}と「普照」^{ふしやう}も乗船していましたが、それは後の話。

さて第十回遣唐使船は、翌天平六年（734）、帰途につきますが、第3船の平群広成^{へぐりのひろなり}は難破して崑崙国^{こんろんこく}に漂流。第4船は、難破して帰らず、かろうじて遣唐太子「多治比広成」^{たじひのひろなり}の乗船する第1船のみが、九州へ帰り着きました。ところが災難はこれで終わらず、翌天平七年（735）、九州太宰府で天然痘が発生し、瞬く間にひろがり、ウイルスは関門海峡をなんなく越えると、山陰・山陽道を通り平城京へと押し寄せたのです。

ところで、我が国における天然痘の発生は、6世紀にまでさかのぼります。「日本書記」には、欽明天皇十三年（552）から用明天皇二年（587）にかけて、突如として疫病の記録があらわれます。時代はまさに、仏教伝来という歴史の転換期。物部氏は突如発生した疫病は、「蘇我^{そが}が日本古来の神々を無視し、舶来の仏教を持ち込んだための神罰だ」と、蘇我氏を非難攻撃します。これによって、物部・蘇我の仏教導入を巡る戦が発生するという経緯です。



天然痘ウイルスと遣唐使船 vol.1

今年は正月早々、平城宮跡にある遣唐使船に乗り込んできました。もちろん復元船ですが、それでも、この遣唐使船で、中国まで出向いたのかと思うと万感迫るものがあります。

ところでその遣唐使ですが、舒明二年（630）に第一回が派遣されて以来、寛平六年（894）、菅原道真の建議により停止されるまで、260年間に20回にわたって実施されています。

しかし遣唐使たちは、この間、一体どんな文物を唐の国から持ち帰ってきたのでしょうか？ 将来の日本を形作る文化が持ち込まれたのは間違いないでしょうが、実は、あまり持ち帰って欲しくないものも含まれていたようなのです。

それが「痘瘡^{とうそう}」、今でいう「天然痘」のウイルスです。

今、日本では「新型コロナウイルス」が世間を賑わしていますが、その昔は天然痘が猛威^{もうい}を震い、WHOが天然痘の世界根絶宣言を行ったのは1980年5月と言いますから、日本だけをとっても、実に1500年近く、天然痘ウイルスと付き合ってきたことになります。



きます。

『続日本紀』は、この様子を「是の年の春、疫瘡おおいに起こる。はじめ筑紫より来れり。夏を経て秋に涉り、公卿以下、天下の百姓、あい継ぎて没死するもの、あげて計



うべからず。近代よりこのかた、いまだこれ有らざるなり」と語っています。

権勢を極めた藤原氏も、権力の頂点にあった四兄弟が次々に「天然痘」に倒れ、政治的指導力は藤原氏の反対勢力「橘諸兄」へと移っていき、日本の政界地図を塗り替えることになっていきました。遣唐使の派遣は文物の招来ばかりでなく、別の意味でも、日本を変えていったと言えるのではないのでしょうか。

また皮肉なことに、その治療に関しても、遣唐使・遣隋使が運んできました。推古十六年（608）、遣隋使として小野妹子が派遣されますが、この一行に薬師恵日も同行しておりました。彼は、推古三十一年（623）に、中国医学・薬学を学んで帰国します。

これが日本における「漢方」の始まりとなるわけです。

また「天然痘」は、これ以降、日本に定着し、江戸時代後期には、小児死亡率の上位を占めることになっていきます。

今、新型コロナウイルスが世間を騒がせていますが、コロナウイルスが見つけられたのは1960年、新型コロナウイルスに至っては2019年と、まさにウイルスのニューフェイス。果たして、天然痘のように、なが〜いお付き合いになるのでしょうか。

また、大陸方面からの渡来者群によって六世紀以前に、すでにその伝来がはじまっていたとみる向きもあります。いずれにせよ、外来文化の伝来に伴い、疫病もそうした人びとの交流をとおして流行していったのではないのでしょうか。

では天然痘の発源地は、一体どこなのでしょう？

いちばん有力なのはインドとされています。それが古代民族の移動交流につれ、おそらくインドから仏教が各地に伝播していった経路とほぼおなじ道、つまり「シルクロードをたどって、世界各地に伝播していったのでは」というのが、ほぼ間違いないことだと言われております。

そこで、第十回遣唐使の話に戻しましょう。このころ日本では、しばらくは天然痘の流行は見られず沈静化していたようです。ところが、この遣唐使の派遣が久方ぶりに天然痘ウイルスを持ち帰り、これまでにない大流行をみるようになりました。たとえば『続日本紀』は、「天平七年（735）夏、^{だざいふかんない}大宰府管内に^{とうそう}痘瘡が大いに発る。冬にいたるまで、この^{えんどうそう}碗豆瘡、^{もがさ}俗に^{おこ}衰瘡という疫病で、多数の死者が出た」と記しています。この翌春には、^{あべのつぐまろ}阿倍継麻呂を大使とする遣新羅使の一行は、その往復の途次、^{りかん}痘瘡に罹患し、大使は病死、同勢 100 人は 40 人に減ったというありさまです。この流行は、天平九年(737)



奈良県桜井市初瀬川の畔に建てられた仏教伝来の碑

に至ってもおさまらず、春にはふたたび大宰府管内で暴発し、畿内におよび、光明皇后の兄の藤原四兄弟、^{たちばなもろえ}橘諸兄の弟^{たちばなのさい}橘佐為らが相ついでこの疫病で死んでい

切ない思いが上がってきます。

以前、「来世の私は、もう無くなってしまうた日本について惹かれ、日本人形や着物やその他和風の物に強烈にノスタルジーを掻き立てられるんだろな」と思った事があります。日本が、過去に生きた国とも知らず、今の肉の私の名前も人生も知らず、田池留吉との出会いも知らず、(もちろん来世はまだアルバートとの出会いも無いからです)「なぜこんなに切なく懐かしい思いになるのか?前世というものがあるのか?」と疑問に思うきっかけになるような気がします。

日本には何度も転生しました。

天孫降臨の地、宮崎にUFOで降り立ちました。

卑弥呼の時代に巫女として祈りを捧げました。

戦国時代に武将として戦い、キリシタン迫害にも加担しました。

江戸時代に女郎として売られ、苦しみました。太平洋戦争で特攻隊員として、若い命を散らしました。

日本を愛し、憎み、破壊のエネルギーを垂れ流し、そしてやつと田池先生に出会いました。

数々の転生の記憶を持って、今度は外国に生まれます。

そして、今世の私は、その外国人の意識の中で、必死に「私に気付いて!あなたは肉では無い、意識、エネルギーなのよ!」と叫んでるような気がします。

今の肉ある間、もっと頑張ろうと思います。

8

アマテラスの国、日本。神国、日本。私はどうしてもこの国に生まれたかった。肉を持ちた

かった。この地にて、言い表すことのできない程の暗黒のエネルギーを振り撒いてきた。巫女として、アマテラスに仕えるものとして、またアマテラスのエネルギーを表す具現者として。だからどうしても今世は田池留吉と共にこの地に肉を持ち、アマテラスを供養したかった。アマテラスの供養。なぜ日本に生まれてきたのか、心を向けるとはつきりと伝わってくる思い。日本はアマテラスのエネルギーでガチガチだった。今世ようやくそのカチカチのエネルギーが綻び始めた。私の中のアマテラスも少しづつ、愛に帰ろうとしている。日本はこれからどんどん崩れて行くのだろう。崩れて崩れて、その姿が無くなるまで天変地異が続くのだろう。だけど日本から伝わってくるのはただ、ただ静かで穏やかで優しい思い。泣きたくなる程の温もり。この温もりに気づかぬままに、ずっと転生を繰り返し、ただ真つ黒なエネルギーだけを累積して

しまった。この地で残された時間、許される限りアマテラスの供養に努めます。

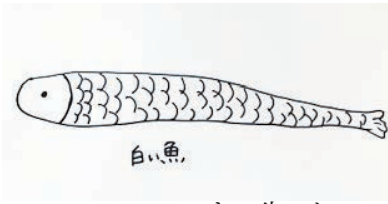
9

田池先生が、「琵琶湖の底には、若い女の子の骨が、沢山沈んでいる」と言うお話しをされました。そのセミナー当時、私はこんな夢を見ました。私は湖に潜もぐっていて、長い魚に出会いました。魚にしては、太く長く白い、変わった魚でした。私は持っていた刀で、スパッと切りました。何故切ってしまったかは、分かりません。その白い魚は、龍でした。その龍は、切った後に、私の娘に変わりました。

長い髪の私の娘でした。娘はとても悲しそうでした。「何で自分の娘を殺したの……」そう言う思いが出てきました。見誤りました。娘を切つて

しまった。なんて事をしてしまったのか。しまった。しまった……。後悔の重い、悲しい、暗い思いが、どっと残りました。この思いを確認する為に、田池先生が、お話ししてくれたんだなあと思います。

琵琶湖周辺、白い龍、若い娘、私、そしてそこには、密教が繋がってくる。ああ、密教をしてきたんだなあ。重く苦しく悲しく暗い思いをずっと抱えてきた。そう言う思いも一緒に、愛へ帰ろうね。



そう今は伝えられる。伝えられる事は嬉しい事です。田池先生、埋もれた思いを掘り返す事を教えて頂き、ありがとうございます。いました。

10

日本の地に思いを向ければ感謝とありがとうの思いしか出てきません。

アマテラスの意識とともに肉体をいただいた日本の地で、私達無数の意識は真実の意識、田池留吉と出会いともに真実を学ばせていただいたという、最高の喜びと幸せを体感させていたできました。

心の中を覗けば、おぞましくて、むごたらしくて、ドロドロとした、どうしようもない凄まじいブラックのエネルギーを抱え持っている、そんな私達が本当の姿を知り、帰っていくふるさとを知りました。

本当の自分、田池留吉の意識とともに遥か遙か遠い遠い過去から生き続けていたことも知りました。今世、初めて真実を知り真実を学べることの喜びと幸せは計り知れませんが。

長い、長い、気の遠くなりそうなほどの長い間、苦しい、苦しい転生を積み重ねてきた私達が、この日本という地で、やっと、やっと、やっと出会った真実、何に例えようもないほどの宝物です。

あと何年、この日本の地で肉体を持てるか分かりませんが、U T Aの輪の核とともに学べる喜びと幸せを大きく大きく広げながら、肉体の終わるその瞬間まで、思うは田池留吉一筋の道を歩いてまいります。

日本の地に、喜び喜びで思いを向けられることが本当に嬉しいです。ありがとうございます。

こうして私達の思いを綴らせていただく機会を、ありがとうございます。

11

応募の文章を読み始めると、心がざわつき始

めました。座っている床に、地震のような揺れを感じ始めました。

「現実として起きるんだ」

「この日本が沈んでいくんだ」

恐怖でのおののく人間達の地獄が見えます。

それは、真っ黒な自分を肉だと思っっている私の心です。

けれど、日本の大地は静かに静かに、意に沿って海の中に消えていきます。

しかし、心を上の方に向けると、アマテラスの喜びが、どんどんどんどん高く高く広がっていきます。

あー、どちらも私の心です。

私と一心同体だった日本、私の日本、私のアマテラス。

愛しい愛しいアマテラス。

ともにともに、日本の国とともに、本当の故郷へ帰ってまいります。

は今も同じ、沖縄に生まれ育った意味が分かります。

セミナー参加で那覇空港を離陸する時、いつも機体にしがみつこうなるとも重たいものを感じました。離陸してすぐ摩文仁の丘・平和記念公園、喜屋武岬、戦艦で真っ黒に埋め尽くされたという海が見え必然と思いが向き心がざわざわするのです。



戦没者の氏名が延々と連なる沖縄平和記念公園

帰ってくる時もあの海の上を通過し着陸。その繰り返しでした。

いつしか真っ黒にしか見えなかった海がコバルトブルーに変わり離着陸がうれしくなっていました。たくさんの意識も共にセミナーに行って温もりに触れ、苦しみしかなかった思いがほんの少し明るくなってきたのかと思います。

沖縄は苦しみ、自分も苦しみだけしかないと思い、その苦しみを硬く握りしめ絶対に放すものかと守ってきました。

でも田池先生は苦しみなんかじゃないと伝えてくれました。本当のふるさとに帰ってきなさい、一人残らず帰ってきなさいと。それを信じて死ぬまでずっと自分に伝えていきます。苦しみなんかじゃないと伝えていきます。



ひめゆりの塔

沖縄を離れて、住民をはじめ、他県他国の大勢の兵士が戦死し故郷に帰れず、その家族は生死もわからず待ちわびて、いろいろな苦しみが詰まっています。この機会を与えてくれてU T Aブックさんありがとうございます。

読者投稿

コバルトブルーの海に……

沖縄から静岡に移り住んでもうすぐ一年。初めて迎える冬の寒さの中、やっぱり南国育ち、沖縄の青い海、青い空、灼熱しやくねつの太陽から降り注ぐ日差しが恋しいです。

十代の頃は縛られてるようで沖縄から早く出たくて高校卒業と同時に大阪に行きました。大阪は沖縄の人が沢山いて安心で何かと縁があります。田池先生が沖縄の話をする時特別という優越感と妬まれるのが怖くなりみんなの前で沖縄の話はしないでとか、被害者意識が「守られて当然」とか思いは裏表色々出ました。

十五、六年ぐらい前か沖縄で学びたい人五十人集まれば先生が沖縄に来るらしいという話を耳にし喜んだのに、セミナー講話中先生がみんなの前でその話をした時、瞬時に「来るなら来てみやがれ、撃ち落としてやる！」で、驚いて恐ろしくて震え、誰にも話せませんでした。そんな思いとっくにお見通しだと思いますが、田池先生が沖縄に思いを寄せてくれたことはうれしかったです。

沖縄は戦場になり、住民をはじめ、他県他国の大勢の兵士が戦死し故郷に帰れず、その家族は生死もわからず待ちわびて、いろいろな苦しみが続いています。私は戦争体験はありませんが、同じ思いを抱えいつも何かと戦ってきました。四方八方、敵を警戒し常に戦闘態勢。瞬時に出すもの



やしてはいけないと言われていましたが、気持ちが良いと5歳の母が言うので、泥水のような水で何度も何度も冷やしてくれたそうです。泥水は良くないかもしれませんが、水で冷やしたのが良かったのか、奇跡的に母は助かりました。

後日、母が私たち子供をお風呂に入れてくれる時、母の肩から腕にかけてのケロイド状の皮膚を見て「どうしてお母さんの腕は変なの？」と聞いたものでした。母は小さい私達には話しませんでしたが、我々が大きくなってから教えてくれました。

作家、吉村昭さんのお母様も小学生の身で大震災を体験されているように聞いています。私の母もよくぞ生き延びたと感慨深いものです。



民災罹の前間瞬難遭跡廠服被所本 (東大震災)

本所被服廠跡遭難瞬間前の罹災民 (「明治大正の絵葉書・写真」から転載)

読者投稿

作家、吉村昭の「関東大震災」というドキュメンタリー小説があります。大正12年9月1日に起こった死者20万とも言われる関東大震災についての本です。その中に、「六、本所被服廠跡—3万8千の死者」という一章があります。2万坪強の被覆廠の跡地に逃げ惑う人々が押し寄せ、大火事と大旋風により多くの人々が亡くなったのです。

これを読んだ時、私は、母が克明に実体験として話してくれたこの大震災の火事について話を思いました。その当時、母は4～5歳だったようです。地震発生当時、家にいた母は、お母さんと姉妹達と外へ逃げ出したようです。が、すぐにお母さんとはぐれてしまい、たまたま家にいた昔の車夫という男の方に手を引かれて地震で揺れる中、そして火事が発生する中を逃げ惑うことになったそうです。

大旋風、所謂、竜巻のようなものがあちこちで起き、大八車が宙に舞ったようです。火事をよける為に、池にも入ったそうです。死体が浮いていたと話していました。ある時、もうすぐ朝鮮（そのころは韓国と言わず朝鮮と言っていたようです）へ行く船が出るという話を車夫が聞き、母の手を引いて船着き場へ行ったそうですが、僅かの差で船は出てしまい乗れなかったそうです。もしその船に乗っていたらと思うと、不思議です。

そんな日が2～3日続いたある日、炊き出しのおにぎりを貰える場所に行った時に、偶然にもお母さんが見つけてくれて名前を呼ばれたそうです。その時、母は身体のおおの多くに火傷を負っていたそうです。いつどこでは分からなかったようですが、逃げ惑ううちに火傷したのでしょう。

お母さんは「この子はもう駄目だろう」と思い、その頃は火傷は水で冷



吉村昭「関東大震災」

日本列島、この島が沈んでいくとき、一緒に沈んで行けたらいいなあーと。

突然こんな思いが出てきた。

「日本へ」と思ったとたんだった。

数限りなく、この島に転生てんしょうしてきました。悪の限りを尽くした。

それも良い事をしてきたと思つてきた。

何一つ想いをかけることなく、感謝の思いもなく、身勝手な思いのまま生きてきました。

罪滅つみほろぼしではないけれど、散々好き勝手な思いで生きてきたのです。

ともに生きてきたことはなかった。せめて、列島が沈むとき、肉があつたら、ともに沈んでいくのもまたいいなあーと、漠然ぼくぜんとした思いの中にありました。

ありがとうの思いとともに、一緒に沈んでい

くのも悪くはないと、ふと、そう思えたのです。

13

出会いをありがとう。

出会いをありがとう。

出会いをありがとう……。

私は愛、あなたも愛、ひとつ。

幸せです。

ありがとう。

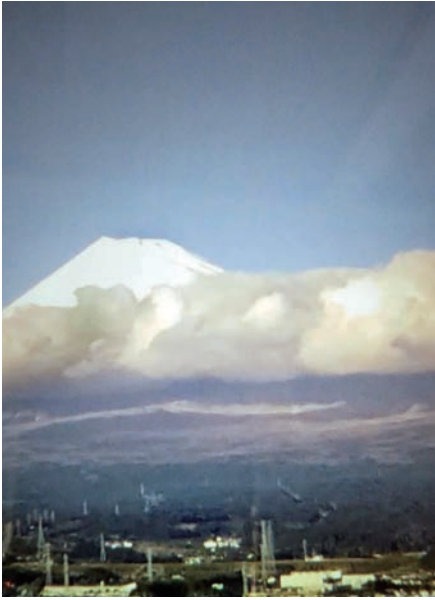
14

日本、アマテラスの国。日本。

富士山。

セミナーへの行き帰りの新幹線の中から何度富士山を眺めてきたことだろう。

山頂を雪で覆われた富士山が大好きだった。
何よりも聳え立ち、何よりも美しく、何よりも



凜とした佇まいに私は心を引き付けられてきた。

私の中のアマテラスそのものの富士山。

崩れていく、崩れていく。跡形もなく……

その潔さを私の中でも味わっていきたい。

そして、「さようなら、ありがとう」と。

15

遥か彼方から、私は、この地球、この日本に
肉体をいただきました。何度の転生においても、
私から流れるエネルギーは、我に従え、我一番、
我こそ神なり、真つ黒真つ暗、凄まじい思いで、
この日本の地を、いえ、この宇宙をも汚しまくっ
てまいりました。

日本の故郷。もう今はどうにもなくなってしまう

ているけど、心に思い出される幼い頃のあちらこちらの風景。どんなに凄まじい思いを流していても、ただ、受け止めてくれている。

待つて待つて待つて待つてくれているんですね。
懺悔ざんげとともにありがとうしかありません。

16

日本で出会った人々

ある日、主人が田池先生に質問しました。

「この団体は来世アメリカでまた一緒ですか」と。

先生は「多少の出入りはあるかもしれませんが大体一緒です」と。

日本の国で学んだ人々と二五〇年後の来世、アルバートの許に集え学べると思おうと胸がドキドキします。

こんな体験もしました。田池先生ご存命の時、

帰りが同じ方向だったため、何度かタクシーに同乗させていただきました。

ある時、そのドライバーさんの思いを感じ、先生に「お伝えしても良いですか」と尋ねました。先生の「お伝えください」との返事を頂き、後日ワープロ（その頃は）に起こし、お渡ししました。内容はほんの短いものでした。

「来世アメリカの地にて形は違っているかもしれませんが、お会いします」と。思い出すとドキドキします、胸が一杯になります。

今世の友とは、どんなに憎み合おうが罵り合おうが、アメリカの地にて再び学び会える仲間です。そしてアルバートの許で学べる喜びを、今ここ日本にて感じている、何と凄すばいことかと思えてきます。

三十五年余りの長い日々を田池先生の許で学ばせていただきました。セミナーに参加した時間、気力は簡単なものではありませんでした。

使い続けてきた心も然り。友に向かい合う心は戦い、争いでした。だから苦しくて苦しくて、生きることがこんなに苦しいものかと泣きながらの学びでした。

ようやく、私は外に心が向いている、心が中に向けられていなかったと気が付きました。

大切な大切なことを忘れていました。一番しなければいけないことは田池留吉を思うことでした。方向が違っていました。中心棒がなかったのです。だからいつも苦しい苦しいと心は叫んでいました。その波動を知って、やっとやっと自分を知ることができました。今世、長い転生の中でようやく自分の苦しい波動を知る大きなチャンスをいただきました。喜びの明かりが灯り始めました。嬉しいです。どうでもいいことばかりに心を使い、苦しんできました。心の使い方を間違えてきました。田池留吉がなかったことを知りました。

今世、母に願い出て肉体をいただきました。使い続けてきた苦しい心に出会いたかったからです。

二五〇年後この心を抱えて転生てんしやうしてまいります。だからアルバートを求めます、田池留吉の波動を必死に思い出します。

私はどんなに幸せな人生を歩んでいるのか、苦しい心がどれ程の愛なのか。

ここで（日本で）、UTAの輪の中で学べるのが、多くの友と学べることがどんなに幸せか、日本の地に肉を持たせたことがどんなに幸せなのか、今喜びをしみじみと味わっています。

17

この自然豊かな美しい日本で何度も何度もの転生の中で流した、肉が本物、自分の本当の姿

を忘れ、落ちぶれ果てた自分、常に外に心を向けた闘い々の歴史でした。神、仏、パワー、真っ黒、真っ黒のどす黒いエネルギーを、まき散らし、垂れ流してきた。この地にごめんなさい。本当の自分にごめんなさいの思いが溢れます。

日本に思いを向けると、返ってくるのは、優しくして温かくて柔らかくすべてを許し包み込む、お母さんの思い。

「……この日本であなた方の流した真っ暗な波動、みんな返していきます。喜びで受け止める優しいあなたを信じていますよ。……帰っておいで帰っておいで……一緒に意識の流れに乗って帰りましょう。」

日本の国は意識でした。母の思いでした。愛だけを流してくれていました。

二五〇年後に、天変地異で極限状態の体験を

経て、アルバートの目に出会い、日本で学ばせてもらった事はつきり思い出し、喜びの衝撃の光景が浮かびます。

アマテラスの国日本、ありがとう。肉ある限り、喜んで愛おしいアマテラスの供養していきます。アマテラスとともに、次元移行していきます。



ありがとうございます日本、私達は帰ります。あの懐かしい故郷、愛の中へ帰ってまいります。

長い長い間、私達は自分という存在を忘れ苦しみの中にありました。

今世、田池留吉が肉を持つ今世、どうしても日本に生まれ出たいとお母さんにお願ひしました。願ひ通りに産んでいただき、そして学びに集えました。

ようやく田池留吉氏との出会いにより真実を知ることになり、数々の転生の中ですべてを憎み呪い破壊し、それでも飽き足らない思いを流しながら、その思いは温かく受け入れられていたと気付けたとき、うれしくて幸せで、ありがとうございますと心から溢れてきます。

日々の生活の中で起きている様々な現象は大変な時を迎えていくのだと感じます。

ともにともにこれからの時を過ごし、肉を離す瞬間にあなたにありがとうの思いを流している、今世こそそうなっていけるはずだと思います。

幼い頃より地が割れ落ちていく夢を見てきましたが、その夢は現実のものとして我が身に起きてくる可能性が大きくなってきていると思います。

この心を感じた優しさを育んでまいります。ありがとうございます日本。

ありがとうございますお母さん、私を日本に生んでくださってありがとうございます。

19

日本、日本、日本と思うと大好き、大好きと出てきます。清く、正しく、美しい日本の国が

私は大好き。

この国がずっと続いてほしい。この国をずっと守ってほしい。ああ、でも清くも、正しくも、美しくもなかった。

本当は苦しくて、苦しくて……。今世やっと心から叫ぶことができた。本当の思いを叫ぶことができた。

この思いとともに二五〇年後アルバートに出会う。それには、あと残り少ないこの日本の地で今世の時間。

しっかりと心を見ていこう。清く、正しく、美しい日本にありがとう。お母さんありがとう。ありがとう。



私は、日本に肉をもちました。何故かわからないですが、私は、日本の国に生まれたくなかったです。悲しくて、寂しくて、やるせなくて等々の思いを抱え込んで存在してきました。そのような私がお母さんに産んでもらいました。そんな自分でしたが小学校の時、見渡す限り田んぼのあぜ道を愛犬と走り抜けていく爽快感、そして勤め先から帰る母を待ちわびるときのいろいろな思い、それから、嫁よめぎ先から、母のもとに帰る新幹線の車窓から、眺める四季折々の景色が好きでした。今はセミナーに通う新幹線の中では、おしゃべりに夢中でたのしみの一つです。

そのような自分が、田池先生と出会い、心見ること自分にできないできました。心の闇をたくさ

んたくさん抱え込んでいる自分、くそたれを感じられることがすこしですがうれいしいです。お母さんに産んでもらってうれいしい。日本の国に生まれてきてよかった。そして二五〇年後に待つてくれる自分が感じるときうれいしくおもいます。

「日本へ」というUTAブックさんの原稿募集を目にしたとき、自分の中が反応してくるのを感じました。日本への思いが異様に私の心に訴えてくる思いを感じて、何だろうかと心に問うてみました。

心に上がってきた思いは、日本を捨ててきたと……。そう言えば若い頃日本の風習が大嫌いで、馬鹿にしてきたことと、それに比べアメリカは開放的で何事もオープンなところが羨うらやままし

く、チャンスがあれば行きたかった。けどど行けなかった。その思いが今も残っていたのか。

今私はこの思いを思い出し、間違ってきたな、嫌なことから逃げてきた、逃げ通せるものだと思ってきた自分に、ごめんね、ありがとうって伝えられます。日本に生まれたから、産んでもらったから、田池留吉の肉と出会え、真実の自分（意識、愛、波動、エネルギー）を伝えてもらい、ともにともに学びの時間を今世いただき、幸せな時間、空間を持たせていただきありがとうございます。ございました。

何回かの転生を経て、そして二五〇年後ニュージャージーで会いましょう。アルバートの呼びかけに必ず応えていきますと自分と約束をして、お母さんに産んでくださいとお願ひしています。

今ここ日本にあること、喜びです。日本で、本

当の自分を知った自分は幸せです。アマテラスとともに帰っていきます。お母さん、ありがとう。

22

日本の国で何度も何度も転生させて頂きました。何も解らずに生まれては死んできました。

今世、日本の国で田池留吉の肉と出会い、この学びに繋がりました。

日本の国で、そうです、日本の国で田池留吉の肉とともに、アマテラスの国日本で学ぶということ、この肉を受け入れてくれたこの国よ、ありがとうございます。

富士山の大噴火とともに日本が崩れ去っても私たちは意識です。ともにともにある喜び永遠です。

来世、日本の国での出会いをただただ有難う

日本が大嫌いだった

日本が大嫌いだった。

儀式・風習・形式・愛国心・
神風精神・神社仏閣・武士道・
勤勉・道徳心……。

形を重んじ、精神論に流され、
勤勉や道徳的であることを強要
される。画一化され、個の自由
などなく、重苦しく、冷たく、
息苦しいものだと、恨み、諦め、
逃げたい思いでいっぱいだった。



そんな私が、学びに触れた。自分の心だけだったことを知った。
温かい思いが、本当の自分だと知った。アマテラスは、優しくっ
たことを知った。

ねらったつもりはないが、書道・剣道・国語など、いつの間にか
日本的なものを指導する立場となっている。だが、昔は窮屈だった
形や精神は、今は苦しみではなく、自分で苦しいものにしていただ
けだとわかった。日本的なものは、本来は極めて自由だと感じる。
優しいと感じる。いつの間にか、日本がとても好きになっていた。

日本が形を崩していく。しかし形は変わっても、日本の広く、
優しく、温かい思いは変わらない。形は崩れても、日本の思いは
なくならない。優しい日本の思いは、250年後へとつながっていく。
日本に、ただただ、ありがとうと言いたい。

と思い出していきます。

日本の国にただただ有難う。

23

日本へ、心からありがとう。

田池留吉、アルバート。

アマテラスとともに学んでいます。

全てが喜び、愛の中にあつたこと、心に大きく広げてまいります。

24

田池留吉に出会う前は、お母さんへの他力、つかんでいる神への思いに恐怖と寂しさと怒りでがんじがらめでした。心を見ることを学んで、U T Aを伝えてもらい、私は真剣にアマテラス



から日本へ思いを向けるようになりました。岩盤の大陸のような、意識の暗闇がうつすらと見えてきて、自分の中に浮かびくる、そんな毎日です。二〇一九年十二月の「ともに瞑想会」で、これが私、私の日本、アマテラスだった、そう思うだけで、私自身の岩盤に届いていくんだと、思いました。日本が沈むのは、私の中のアルバートを求める思い、アマテラスの思い、動かない宇宙が温もりへ帰りたい、命がけの思いだと、伝わりました。だからこの私の作ってきた暗闇の世界に飛び込んでいこう、天変地異にこの日本に答えていこう、と思いました。ぼんやりと生活している時も、必死にもがいて闇と生きている時も、自分を包み込んでくれている温もりに触れられるから、この岩盤の心を持つて生まれ変わっても、アルバートの波動に触れた自分とともに、未来へ進んでいくのだと感じています。お母さん、ありがとう。日本に生んでくださっ

て、肉ではわかりませんでした。そう思える今が、嬉しいです。日本は地球、母なる宇宙でした。

25

このところ、英語版「パプリカ」が無性むじょうに聞きたくなるのです。何度も繰り返し聞いていると涙があふれ出てきました。尋常しんじょうではない。なんで？と自分に尋ねて上がってくる思いのままにしたためてみます。いろんなことがごちゃ混ぜに出てきますが、その通り書いてみます。

黒人の男の子が前に躍おどり出てきてリズミカルに踊る姿を見て、二歳になる自分の孫も黒人の過去世がある、そしてこの子を産んだ娘も。じゃ、お母さんは？って問いに、自分の過去世は分からない。でも最終の生まれ変わりは黒人、と出てくる。

でも日本には何度生まれ変わったことかしかない。五人組の子供たちが踊っているバックに見えるまさに日本的な山を見、私はいつかこの先の転生てんしょうでこの歌を聞いて泣くだろう。

心が日本を思い出すのだ。広がる草原で軽やかに踊るその足元の大地はかつての戦場。この大地にどれだけの血と涙を吸わせてきてしまったことか。どんなに静かで美しい自然の中に生きても、心はいつも戦いと恐怖ばかり。少しも優しい思いを、この日本の国に流してあげることはなかった。すまないと思う。本当にすまない。

生活をしながらでも時々、現在に過去や未来が出てくる。何も驚くことではなかった。ずっと過去とも未来とも一緒に今を生きていることを知らなかっただけ。少しずつ、声が聞こえてくる。聞いてこなかった自分の声。その声が

初めて言う。

「日本よありがとう！ 本当にありがとう！ いままでありがとう！」

26

愛へ帰ろう、ふるさと、母なる宇宙へ帰ろう。その呼び掛けが私の心に響いてくるのを強く感じます。日々、ゆったりとした時間、空間もあり、私は、以前思い描いていた恵まれた環境に存在を許されています。

真つ黒い闇を宇宙に日本に垂れ流し続け、間違いつづけてきた私でも、お母さんは、この日本に大阪の地に肉を与えてくださいました。私には、今世生まれなければ後がないという必死の思いでお母さんにお願ひしたのです。私は、戦後数年経って超未熟児で生まれ、両親は必死で育ててく

ださったと思います。今世の私の肉はとてもシンプルで、幼くして両親と別れ、なんの取り柄もなく、頭脳明晰でもなく容姿も良くありません。だから、私は悩みました。苦しんで、心を小さくしました。だから、良かったと思います。真実を知りたいという探究心が、芽生えてきたのです。だから、多くの本を読みました。宗教遍歴もしました。そして、やっと、やっと、田池留吉氏に出会え、真実を伝えていただきました。私は嬉しくて、

生かされて今があることが、どんなに幸せかを痛切に感じています。戦争もない平和な日本に肉を持ってたことが、私にとって良かったと、この学びをする最適な場所だったと思います。意識の流れに沿って生きていけることが私の喜びです。でも日本が消滅していくのだと思うと悲しい思いが出てきますが、同時に有難うの思いがこみ上げてきます。真つ黒い、苦しい闇を流し続けて、日本を破壊破滅に追い込んでしまったのに日本の地

は喜びで消滅していくのですね。私は、日本に存在していた事、決して忘れません。田池留吉と出会えた素晴らしい地です。有難う。有難う。来世必ず、日本での喜び、幸せを体験したことを思い出すでしょう。

27

日本に受け入れてもらってるということを忘れるくらい、肉で小さく生きてきたなと思えました。日本を思った時、四季折々の自然が出てきました。自分の心の中に息づいている春夏秋冬それぞれの景色が、私をやさしく包み込んでくれていたんだと改めて感じました。もともと自然は好きだけど、日本と思った時にさらに大きな愛の中に存在していたんだと心に伝わってきました。

競争ばかりしてきました。優越感と劣等感の間をいたりきたりしてきました。小さく小さく生きてきました。そんな自分の思いを吐き出させてくれて、見つめさせてくれて、修正する機会を与えてくれた日本でした。

繁栄と衰退の道を一気に突き進んでいる日本の国は、まさに人間の作り上げた凄まじいエネルギーの象徴の国だと思います。私のエネルギーを如実に見せてくれています。そのことをしっかりと受け止めて、来世に繋いでいる今世の最期にできればいいなと思います。

心の底から「日本、ありがとう」の思いで死を迎えたいです。

28

世間に恥じない生き方。お天道様が見ている。

協調性、規律、勤勉、忍耐、連帯責任、個を消し周囲や強いものに従う、等々。



形を整える。それをとても大切にしてきた。
素晴らしい自分であれど。

心を縛り続けてきた。

苦しみ続けながら、この日本で生きてきた。

崩れる事、バラバラになる事、まとまらない事、

許されない。

そのようにずっと自分たちを縛り続けてきて、

形が崩れていく流れとなった。

自分の使ってきたエネルギーに気づいて下さ

いと、促しがあった。

お母さんに産んで頂き、形を整え続け、その

どれもこれも失う。

形を崩していく、それほど大きな愛のエネルギー

ギーが働いた。

愛しい日本、アマテラス。

一緒に愛に帰りましょう。

29

原稿を書こう、書く前に「日本」へ心向けて
みました。瞬間、涙が溢れ出しました。

お母さんをお願いして生んでもらいました。私
はどうしても田池留吉に出会いたかったんです。
生まれた瞬間の喜び、嬉しかったです。お母さ
ん、生んでくれてありがとう！お母さんの瞑想
を通してふと出てきた私の思いです。日本に生
まれてきて良かった。そして、田池留吉に出会
えました。学びに集いました。私の計画とはいえ、
本当に奇跡のようです。

私の今世の唯一の仕事はアマテラスの供養だ
と言われ続けてきたのに、何もしてきませんでした。
学んでこなかったんです。本当に肉に溺
れた愚劣極まる私です。本当の私の思いを遮さえぎっ

てきました。

瞑想すると出てきます。「ラストチャンス!」。もうやるつきやないです。この日本の国に、お母さんにお願いでして生んでもらって、田池留吉に出会えたんだから。あとは「私」次第です。何か嬉しい、嬉しいです。

30

田池留吉を日本を思う。

ありがとう、ありがとう、日本の国よ、ありがとう。

私は帰ります、ふるさとへ愛へ。

懐かしいふるさと、私を待っていてくれるふるさと、母なる宇宙へ、私は帰ります。

悲しみ苦しみ恨み辛み、私から流れる真っ黒なエネルギー。すべてを受け容れ、包み込んで、そして育んでくれた日本よ、日本の国よありがとう。

肉持つて今世、田池留吉の意識の世界を、真実の波動の世界を学ぶことができた、学ばせてもらうことができた。

ようやくようやく見えてきた、私の帰る道筋が。私は、帰ります。アマテラスとともに帰ります。ありがとう田池留吉、ありがとう日本。

日本の国よありがとう、そしてさようなら。

31

日本へ……という時、出てくるのは、形ある日本ではなく、アマテラスです。アマテラスという意識が、形作っている日本という国は、確

かにその形を変えていきます。物理的には、地震、沈む、火山の爆発そのようなことが起こり、今ある日本の形は大きく変わっていくでしょう。アマテラスが、アルバートと出会う為に、この日本という国に、田池留吉が肉を持ちました。そして、私達も、日本に生まれてきました。アマテラスの意識は、今、二五〇年後に向けて、大きく変わろうとしています。二五〇年後の次元移行に向けて、宇宙が動き始めています。アマテラスは、次元移行に欠かせないエネルギーなのです。

巫女^{みこ}の時代から共に生きてきたアマテラス、そして、この日本という大地、意識の流れの中で、大きな役割を果たしてゆきます。それが、喜びです。形はあつて無きもの、意識だけが存在しています。日本の大地、ありがとう。そして、アマテラスと共に私達は、二五〇年後に出会います。

32

日本に思いを向けました。

自然一杯の田舎で生まれ、育ちました。三世代家族、犬や猫、鶏、牛もいました。鳥のさえずり、虫の声。四季折々の食べ物、行事。のんびりと過ごせるはずなのに、私の心はいつも落ち着かない。いつか、この世界から脱出してやる、そんな野心で一杯でした。逃げたい、都会ならこの心は満たされるのでは……すべて、母を嫌い、母を捨て去る思いでした。それが分からず、この日本さえ、見下げていました。

受け入れがたい、私の現象をきっかけにこの学びに集いました。タイケトメキチとの出会いがありました。

「お母さんの反省」と聞き、逃げてきたはずなのに……そう思いました。なぜ母なのか、扨拭^{ふつしよく}

できない思いが突き上げながら、こんなに母を切り捨ててきたことを知りました。

そして、日本を思います。

私はこの母に全てを託し、この日本を目指してきた思いがありました。それだけでよかった、それが喜び。タイケトメキチの肉との出会いを果たし、自分を学んでいく人生を知りました。この肉に伝えていただきました。

ありがとうございます。日本から、私を学ばせていただきます。厳しいこれからの現象はさらに私の心を揺らしていくでしょう。その中で、タイケトメキチを思う実践をかさねてまいります。

33

駄菓子屋は1ドルでなんでも買え、ケチャップ・缶詰のラベルは英語、アメリカが身近で日

本は遠い遠い異国、自分が日本人という感覚はありませんでした。種水判定で大宝に行き、田池先生の家の周りを一周したとき「みんな一緒ひとつやで、信じてや」と伝わってくるものがあり、その帰りの電車の中ふと周りを見回すと「あれ？みんな一緒？私と同じ？」その一瞬でバリアが消え、消えたからこそ壁を作ったのは自分のほう、苦しみを守ってバリアを張って生きてきたことをはつきり知り、納得できたことはとてもうれしかったです。

いつも私だけこんなに苦しい、周りの人から「私はこんなにしあわせ。それに比べてあなたは……」と感じる、ちくしょー、真っ黒で何が悪い！淋しくなんかない、怖いものなど何もない、そんなものをつくの昔に捨てさった。その^{あわれ}憐みの目で私に触れてみる、お前ら道連れに自爆してやる。どこから来ても迎え撃つ覚悟で四方八方、気を張り巡らせて「日本」に来て、セミナー

に参加してました。

田池留吉の「みんなひとつ」が染み渡って「日本」は異国では無くなりました。懐かしいふるさと、ともに帰ろうそんな呼びかけが聞こえます。ありがとうございます。日本、ともに帰ります。田池留吉ありがとうございます。底の底の底の地獄の底まで愛をありがとうございます。

34

私の大好きな富士山を思います。

富士は日本一の山♪

この歌のメロディが浮かびます。

家のすぐ近くの海からの富士山の眺めは最高

です。朝に夕に散歩しながら海と富士山の景色を楽しんでいます。

この綺麗な景色が見られなくなる？ まだまだ信じられないのですが……私の肉がある間にそれが起こるのかどうか？

時々大好きな富士山の写真を撮って友達に送ります。

学びの友でない友人からは「やはり富士山は素晴らしい！」「身の引き締まる思いがする。」「すがすがしい。」「元気が出る。」「思わず祈ってしまふ……」などなどの感想を貰います。

私も学びをしていますが、やはりこの心が健在です。

富士は日本一の山。秀麗富士の山。姿かたち



がなんと美しいか！日本の誇りです。

堂々と気高く……あ、あ、アマテラスを形に
して見せてくれているのですね。それが間もな
く崩れていくのですか??

セミナーへの行き帰りの新幹線の窓から何度
も何度も富士山の姿を楽しんだ。

先日は羽田から福岡への飛行機の窓から素晴
らしい富士山を見ることができた。

富士山に思いを向けると、

「ただただありがとう！嬉しい！」と返ってき
ます。

私もこの肉を終えるとき……そういつて終え
ていけるのか??

二五〇年後に繋げていけるように残された時
間を大切に過ごします。

大好きな富士山、そして日本にありがとう！
タイケトメキチありがとう。

35

日本は私の全てでした。大好きな日本を助け
護りたかった。沈没という形で消えていくのは
残念だけれど、必然のことなのだろう。小さな
国でも心が一つになれば大きなエネルギーが生
まれるという一つの試みが、田池留吉先生―塩
川香世さんを通して意識の流れという真理を産
物として結実し、日本劇場の幕が下ります。真
実の道の末席にやつとの事で辿り着くことがで
きました。数や形ではないよ！心だよ！と日本
が教えてくれました。ありがとう！ご苦労様さ
ん！お世話になりました！とやさしい日本に心
の中で告げたいです。この土地に何度も転生し

て勉強の機会をいただきながら、本当のことが
分からないままここまで来ました。アマテラス
は私自身でした。今世も未だ道半ばではあるけ
れど、真実の方向は少し掴むことができました。
二五〇年後に最終転生を達成し次元移行が実現
出来るように残された人生を過ごしていきます。
大好きな日本よ、ありがとうさん。

36

UTAブックから日本に向けてのお別れの文
を読む。すぐに両手を挙げて、ありがとう、あ
りがどうの思いが出た。

これを書いていても涙が出てくる。

まだまだ感じてない私、これは頭からかと思
う、疑う自分、信じよう信じよう。私なんだと。

良かった良かった日本に生まれて、長男を産



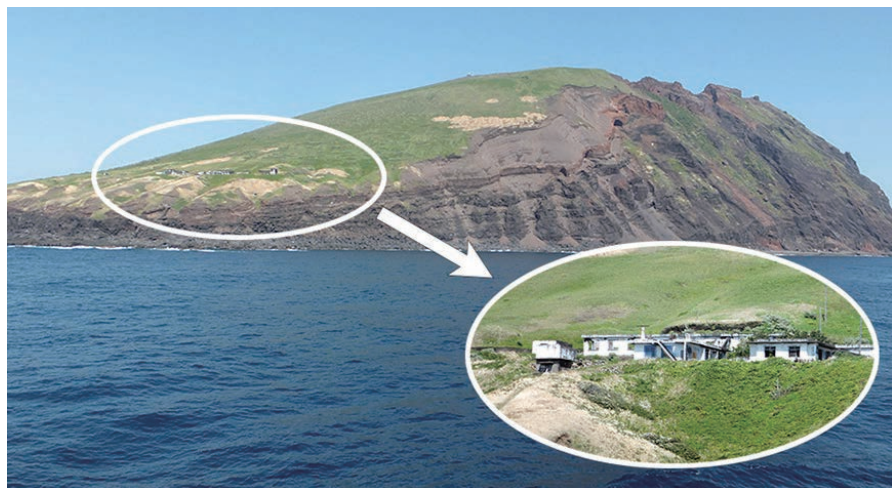
アホウドリの営巣地が遠望できました。

ところが漂流者だけならまだいいのですが、明治にはいるや、羽毛の原料として「アホウドリ」がターゲットになりました。ヨーロッパの羽毛布団の原料として、集団で営巣するアホウドリに目が向けられたのです。こうして「アホウドリ」は日本にとって貴重な外貨獲得手段となり、鳥島だけで推定500万羽の「アホウドリ」が、人間の欲の犠牲になっていったと言います。

明治期、鳥島にはアホウドリの羽毛採取のため、125人ほどの島民がこの仕事に従事していましたが、1902（明治35）年の鳥島噴火により全員が死亡するという悲惨な事故が起きました。この後も、牧牛を主体としながらアホウドリの羽毛採取の事業が続けられていましたが、これも1939（昭和14）年の噴火で壊滅します。やがて太平洋戦争が終わり、1949年、アメリカの鳥類学者が鳥島を調査した結果、一羽のアホウドリも見つけることができませんでした。

これにより、いわゆる「アホウドリ絶滅宣言」がなされたのです。

ところがです。1951年になって、鳥島で繁殖しているアホウドリが再発見されたのです。



おがさわら丸から、かつての集落跡と溶岩の流れ落ちた痕が観察されました。

2016年4月19日21時40分、竹島栈橋発の「おがさわら丸」に乗船、いざ小笠原の父島を目指します。今回は通常の航路ではなく、「鳥島」や「そうふ婦婦岩」へと立ち寄り、それら島の周囲を一回りし、その後、小笠原へ向かうというのです。このため通常25時間30分の航路が、32時間20分かかるといいます。予約時点から「随分時間がかかるなあ」とは思っていたのですが、まさか、こんな特別プログラムになっていたとは気が付きませんでした。

おかげで「鳥島」の「アホウドリ」についても、船内のレクチャーや、遠望ではありますが貴重な観察をさせていただき、自然と人間の向き合い方についても深く考えさせられた次第です。

昔、北大路欣也主演の「漂流」という映画を観たことがあります。鳥島に漂着した主人公が、生きるために「すまぬ、すまぬ」と口走りながら「アホウドリ」を棒きれで撲殺していくシーンが忘れられません。この無人島では水にしろ、食料にしろ、無数に生息するアホウドリを殺して手に入れるしかなかったのです。人間に対する警戒心もなく、おまけに陸ではヨチヨチ歩きしかできないアホウドリは、飢えた漂流者の格好の餌食となりました。

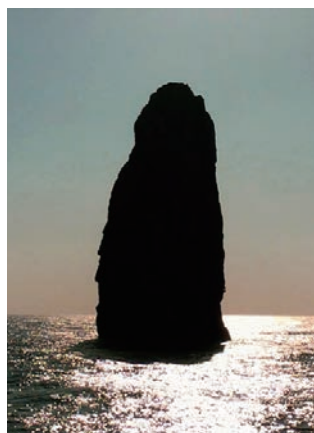
このアホウドリの群れを、火山噴火の恐れのある鳥島から安全な地域に移住させようとする計画があります。選ばれたのは、鳥島から南に約350km、小笠原諸島の^{むこじま}鴛島です。計画は2008年から開始され、5年間で、のべ70羽の^{ひな}雛が移送され、さらに2016年には、人工飼育個体が初めて鴛島での繁殖に成功したと言います。

アホウドリは、人のいない無人島で繁殖してきました。そこへ人さまが人間の都合で割り込み殺戮の限りを尽くしました。新たな移住地も、人に荒らされない無人島です。でも逆に、アホウドリが、人の生活する町や村で大繁殖したらどうなるのでしょうか？ 人間の生活を脅かさないと暗黙裏の了解のうえに「保護」があるのでしょうか？ 今、「動物愛護」という「上から目線」でなく、「動物の権利」を考えるとという新たな発想が芽生えはじめていると言います。クジラやイルカの問題、鹿の問題、アホウドリの保護等々、これから人間は、自然とどう接していくのかを、本当に考えていく時期に来ているように感じます。「答え」はまだ霧の中ですが……。

そんなことを思っている内に、おがさわら丸は、鳥島海域を離脱し、次なる目的地「^{そうふ}孀婦岩」へと向かっていきます。孀婦岩へ到着するのは、2時間後ということです。

ところで、この孀婦岩というのは、鳥島の南約76kmに位置し、標高99m、東西84m、南北56mの孤立した岩の柱です。これを調査したイギリス人は、旧約聖書で神の指示に背き「塩の柱」に変えられた女性に似ていると、「ロトの妻」と名付けられ、この命名を意識し「^{そうふがん}孀婦岩」という名称があたえられました。

ところで、この孀婦岩、気象庁により活火山として認定されているそうです。



太平洋にポツリとそびえる孀婦岩



鳥島での繁殖の様子と鳥島の全景。右下の写真には溶岩が流れ落ちた痕が見られる。

乱獲から転じて「アホウドリ」は、今度は保護される対象になりました。それもつかの間、1965年の火山性群発地震により、保護観察をおこなっていた測候所が鳥島を撤退することになり、この活動も休止することとなってしまったのです。

おがさわら丸は予定通り、翌12時40分頃、鳥島の見える海域に到着し、いよいよ、これから1時間かけて鳥島を周回します。

鳥島は全島面積4.79km²、直径2.7km、標高は硫黄山で394メートルという小さな火山島です。ここにアホウドリの大群が生息し、その羽毛をターゲットに、人々が移り住み小さな集落を作っていました。明治、昭和の噴火活動で、今は無人島になっていますが、周回途中、溶岩が海へ流れ落ちた痕を見たり、かつて島民が住んでいた集落跡を遠望したりと、あっという間に時間が過ぎていきました。鳥島に残されたアホウドリの営巣地も視認しましたが、昔、映画で見た驚くようなアホウドリの大群とはちがひ、群れが細々と生き残っている、そんな感じでした。

んで、しかも大阪、田池留吉の住んでいる近く、不安定な息子を持ち、その為田池先生とのつながりも深く、今思うになんともつたいない、なんと無礼なことをしてきた、上に立って己一番、反省しきりといってもまたむくむくと肉が出てくる。

こんな恵まれた日本の国に生まれて良かった良かった。私には一番必要な場所。

人と人とのつながりもしかり、いま日本のあちこちで起こる現象当然だと思っ。

自分がその目にあつたらきつと恐怖が出て恨みも出てくるだろうが、

さよなら日本

ありがとう日本

涙が出てくる。なんでだろうか。

「さよなら日本」に意識を向ける

地球、それは田池留吉が肉体をもって、私に愛を伝えた宇宙。そして日本の地に、私も田池留吉も肉体をもって出会った。それは肉での出会いの始まりであり、田池留吉という意識との出会いの始まりだった。「さよなら日本」と思ったとき、今世田池留吉から伝えてもらった、本当の私を信じる道が、来世のアメリカまで延びている。来世アメリカの地に転生し、アルバートと共に四次元移行をすることを思った。

「さよなら」というより、私にとっては、この日本の地は、田池留吉と出会った、始まりだった。意識の流れを伝えてもらい、心の中に培ったぬくもりを来世につなぐ、そのスタート地点が日本だった。

天変地異の足音がもう響いてくる。これから

ますます、その音が大きくなり、日本の地形が様変わりしていくだろう。

宇宙に向けた瞑想の時に、母なる宇宙という思いが広がり、どんどん軽く大きくなっていく。無限に広がる宇宙の中で、私は一つとなり、広がっていく。

肉体をもってこの地球で田池留吉に出会ったことの奇跡を感じる。果てしない喜びの中で、私は存在していた。

そのことを忘れ、肉体を自分だと思ってきたことの、転生に終止符を打つ時が来た。母なる宇宙へ帰ろう。本当の私に帰ろう。

アルバートに向けて、どんどん広がる世界。宇宙が大きくなっていく。意識の流れの中で、光の渦うずが大きく太く流れていく。二五〇年から三〇〇年にかけて、アメリカの地に転生し、ま

たアルバートと出会う。肉体をお互い持ち、意識の流れに乗るシナリオはすでに始まっている。「愛へ帰ろう、愛へ帰ろう」その呼び掛けに応こたえる意識が増え、意識の流れは着実に流れていく。地球という星を経て、四次元に飛び立つ。流れはすでに敷かれている。その流れに乗って、喜びで帰ろうと思える今、帰れると思えることが嬉しい。

母なる宇宙に向けて感じたこと

一つ、意識は一つの大きな輪が広がり、私はその輪の中にいた。二五〇年から三〇〇年にかけて、次元移行する意識たちのグループができていた。心を見ることがどれほど大切かを知った。心の中に確かにあるUTAの輪、アルバートに対する信みずかがその輪を支えている。他力では進めない。自らがその輪に加わり、輪の一員と

なって、輪を広げていく。それぞれの心が広がって輪を大きくしていく。

宇宙が変わる。宇宙の友が待っている。心の中に確かにできた信、信を培い、輪を大きくしていく。自然、それが自然だ。愛は拡大していく。大きく伸びていく。心が広がり、広がり、どこまでも広がる無限の世界。母なる宇宙が待っている。喜びで待っている。喜びで帰っていきこう。

意識の世界は一つ。田池留吉が伝えたUTAの輪、宇宙が変わっていくとともに、UTAの輪がくつきりとはつきりとしてくる。UTAの輪の仲間たちが次々と輪に加わり、大きな喜びとなる。来世二五〇年から三〇〇年にかけてUTAの輪は成長していく。それぞれが心の中に愛の灯をともし、愛の輪を支えていく。

「共に帰ろう」その呼びかけに素直に応えていきこう。愛へ、愛へ、流れていく。意識の流れ、宇宙の風に乗って、意識の流れに乗って帰って

いこう。愛のふるさと、愛の母なる宇宙、心の中に生きている愛のふるさとへ帰ろう。

38

今回のテーマ「日本へ……」に向かい合うまで、日本へ思いを向けたことがなかったことに気づきました。美しい富士山、美しい四季折々の自然はいつもそばにあるもの。その形がもうすぐ崩れていく……日本は私にとって何なのだったのか、なぜ日本に生まれたのか、自分に聞いてみました。

意識の転回、意識の転回とでてくる。

田池留吉に会いたかったとでてくる。

美しい日本、アマテラスの日本

愛おしいです。

天変地異と思えば、肉の私は恐怖。目に見える世界をまだまだ信じている私には、恐怖しかない。現実にはそうだと思えます。しかしその一方、その瞬間、私は、心在中に向けてともに帰ろうと思えるかもしれないと思っています。それは、今の私次第だと感じています。頑張るしかありません。

田池留吉、お母さんと思って、この恐怖に思いを向けてみました。

この恐怖は過去、未来をすべて含んでいる恐怖だ、今みんな帰りたいと必死で叫んでいると思えました。その時、少し心が緩み、うれしいというほどではないけど安堵し恐怖の質がかわりました。

今世このように何もないうきに、思いを向けるなどかつてないことでした。田池留吉に出会

えたからでした。途轍もなく凄いいことでした。言葉で言い表すことはできません。なのに何故肉の私はこのように体たらくなのでしょう。私の中には今この時がどんなに大切なときかについて、伝えてられています。

肉基準の中でどんなに幸せを求めても、幸せはない。

私をもっと自由に広げていける宇宙へ向けて瞑想をしていきたいと思えます。

39

ふるさと。

日本。

私は、物心がついたころから、自分の家が

嫌いでした。

暗くて息が詰まる空気。争あつそいが絶えない毎日。落ち着く部屋もない。毎日耳を塞いで、現実逃避していた。

家族が悪いと恨うらんできたけど、私が私に与えてくれた学びに繋がるための環境でした。

ふるさとの風景を見ると、一瞬で幼い頃に戻ります。切ない気持ちがほとんど。懐なつかしい嬉しい気持ちにはなかなかない。

もう実家もなくなっただけど、いろんな場所に、たくさんの方がいます。たくさんの方がいるからこの学びを頑張れる。

今までありがとう。勝手に嫌いになっただけめんなさい。

40

あーうれしいです。うれしいです。うれしいです。たくさんの私を感じてきました。

たくさんのたくさんの、私自身との出会いがありました。

たくさんの出来事の中で私は、私の中のたくさんの私自身との出会いがありました。それがこの日本の国です。うれしいです。うれしいです。うれしいしありません。ありがとう、ありがとう日本の国よ、ありがとうございます。たくさんの私に出会わせていただきました。たくさんのたくさんの人達を通し出来事を通し、私は、たくさんの自分自身との出会いを果たすことができました。ありがとうございます。そう言っただけ私たちは、この日本の国から旅たっていきます。ありがとうございました。

ありがとう、ありがとう、ありがとう。

日本を思うと、感謝の思いしかありません。例え海の底に沈んでも、世界地図から消え去っても、小さな島国の日本は忘れられません。

あー、何としても生まれたかった地です。田池留吉にどうしても出会いたかった。アマテラスとともに本当の自分に帰れたかった。

涙が溢れ出てきます。二五〇年後の私が語ります。はつきりと覚えていきます。私は日本でタケトメキチに出会いました。セミナーに足繁く通いました。素晴らしい時間を多くの仲間と共有しました。あの感動、あの喜びは忘れられません。幸せでした。ずっと幸せでした。形はそれはそれは大変な中を生き抜きました。でも心はうれしかった。アルバート、今も私の中には日本が生きています。あー懐かしの日本、あー



お母さんと大声で叫びたい気持ちです。母なる宇宙へ帰る第一歩を踏み出した地、思い出すだけで、歓喜で言葉になりません。

「日本へ、田池留吉との出逢いをありがとう」

幼い頃から家の窓より見える山が好きで水彩画で何度も描いていました。

学びに集って初めて二上山を目にしたとき、瞬間的にその山に似てると思いました。

巫女みこの私は学びに集う前からずっと私に訴えてくれていたんですね。この学びをどれだけ軽んじてきた自分だったか、今、懺悔ざんげの思いが出てきます。

今世、田池先生の肉に最後まで反発していた私でした。でも今、先生を思えば優しい田池留

吉の目があります。私はいつもこの優しい目の中であつたんだなあ、そう思います。

どの転生てんしょうも自らこの温もりを拒否し、心に重い蓋ふたをし続け、苦しみの渦うずへ墮おちていった数知れない自分。

この先、日本の国の崩壊、天変地異、死。大荒れの現象の中で自分の学びの成果を感じるはずです。残された時間、自分の他力のエネルギー、巫女を抱きしめていくこと。必ず二五〇年後に繋げるよう、おかあさんの温もりの中で自分を見つめていきたいと思います。

【沈みゆくふるさとに向けて】

おかあさん、ありがとう。この地に肉をありがとう。

私は過去より沢山の神を心に入れてきた意識です。今世、真実に出逢わせていただきました。

この信仰深き場所で自分の他力のエネルギー

を徹底的にみつめることを計画してきました。

しかし私の心はまだまだ小さいです。神をしっかりと握っています。己一番アマテラスのエネルギーはとても凄まじいです。

「私を幸せにしてください」そのエネルギーがどれだけ自分を八つ裂きにしてきたか。他力のエネルギーの愚劣さ、自分を捨てたその心にとんどん出逢ってください。それがあなたの喜びに繋がっていきます。

これから日本は崩壊していきます。人々は手を合わせ祈るでしょう。その時、あなたはその現象から自分の中の祈りのエネルギーがどれだけ愚かなことだったか心で知っていくでしょう。喜びで受け入れていってください。あなたが掴んできた神とともに喜びで沈んでいけるあなたであってください。

二五〇年後、お待ちしております。



こんな糸島市は、西は福岡市に隣接していて、福岡の中心街まで車で30分程の位置にありながら、都会とは違うゆったりした時間と、何処から来た人でも受け入れる空気が流れていました。

ここ糸島は、その昔「伊都国」と呼ばれた所です。その昔も何処から来た人をも受け入れる懐^{ふところ}の深さがあったのだろうか、どこか懐^{なつ}かしさを感じさせてくれる街でもありました。

糸島での暮らしを思う時、あれもこれも良かった楽しかったという思いが湧いてきます。

季節ごとに咲く花々、梅雨の蛭、夏の夜の花火大会、秋の田んぼと彼岸花、そして、新鮮で美味しい農産物、畜産物に、冬には焼き牡蠣小屋が並ぶ豊かな魚介類。

でも、それ以上に、温かい優しい風が吹いているような自然の豊かさに癒される糸島が好きでした。



糸島の風景

糸島市は福岡県西部の糸島半島いとしまはんとうにあり、北には玄界灘の美しい海岸線、南には脊振山系せぶりさんけいの山々、そして中央部には里山と田園風景が広がり、季節ごとに移り変わる自然の風景を見せてくれる街でした。

糸島には、ただ眺めているだけ、そこに居るだけでいいと思える場所が幾つもありました。

その一つは「青くて広い海」。

糸島半島の海岸には白い砂浜が多く、青い空と青い海が水平線まで広がる。

その中でも、幣にぎの浜は美しい白砂の海岸が広がり、エメラルドグリーン of 海から波が寄せては返すのを見ているだけで、海はいいなと優しいなと思える。

天気の良い日の夕暮れ時は、空一面に刻々と変わる夕焼けと、水平線に沈む真っ赤な夕陽は、例えようもないほど美しい光景でした。

そして、もう一つは「ぼくしゅう麦秋」。

糸島半島では二毛作が行なわれ、春から秋までは田んぼで米を作り、秋の稲刈りの後に麦の種を撒く。真冬の麦畑は麦の芽が伸びて新緑となり、麦踏むみを経て、春には麦が実り始め、5月には麦の穂が銀色に光る「ぼくしゅう麦秋」が広がる。

風が吹く度に見渡す限りの麦の穂がそよぐ光景はとても美しく、いつまでも眺めていたい風景でした。

更に、もう一つは「陶芸工房のギャラリーカフェ」。

糸島半島には陶芸、木工、ガラス等の多くの職人が工房を設けていて、その中の1軒がこの「陶芸工房のギャラリーカフェ」です。

杉材の香りがするギャラリーカフェでは、寒い季節に薪ストーブを焚いていて、薪の炎のほんわりとした暖かさを感じながら、窓の外に広がる田園風景を眺めて美味しいコーヒーを飲むことができ、静かでのんびりとした時間が過ぎていく、ほっとできる空間でした。

日本列島よ ありがとう ありがとう

嬉しい 嬉しい 本当にありがとう

喜び喜びで崩れていく日本列島よ

ありがとう

嬉しい 嬉しい 嬉しい

喜びで喜びで崩れてくれて

日本列島よ ありがとう

まだ思春期の、いろいろな感じ始めたころから、日本が嫌いでした。この地から出たいと思ってきました。何故なのか分からない。けれど、深い憎悪ぞうおの念を感じてきました。学んで分かりました。この地で血で血を洗う闘いを

繰り広げ、地獄の底の成れの果ての己の姿を感じていたのです。日本を、全てを、憎んできました。全てを、呪ってきました。

アマテラスは苦しかった。叫べども叫べども行く先は分からず、だからこそ、どうしても、蘇よみがえりたくて、今世、お母さんに産んでもらいました。ああ、何としても母のところに帰りたい、この呪わしい地で、呪いに凝こり固まった自分、出会いを果たしました。

今、日本へ……ありがとう、受けとめてくれてありがとうと、伝わってきます。私の中のアマテラスは、苦しみの意味が分かりました。苦しかったからこそ良かったんですね。すべてが愛だったんですね。ありがとう、お母さん。ありがとう、タイケトメキチ。この地で、アマテラスとともに喜びへ変わっていきます。

これまで長い間ありがとう、幼少の頃過ごした日々、山々を眺めながら、涙を流したり、願ったり、祈ったり、修行をしていました。

走馬灯のように次から次へ間違つて生きてきたとは思っていなくて、いつも、苦しい思いを抱えながらいました。

私が住んでいたところの近くの山は、山の掘削で爆破され、貝やヒトデ、炭の化石がたくさん出て、子供ながらに、単純にここは、海だった。毎日、化石を掘りに行っていました。

苦しい、苦しい転生てんしょうでした。

暗い暗い、狂いに狂った、聳そびえ立つ、その心を見なさいと、その心を見つめるために、その心を開放する手立てを知りたくて……。

田池先生に出会えました。なかなか素直になれませんでした、肉肉どっぷり、「暗いくらい重たいなあ……」、本当に暗くて、重い私です。

何度も何度も肉を持たせていただきました。宇宙を汚しに汚しまくった……。という表現がぴったりの私です。

申し訳ありませんでした。

本当に、ありがとう、ありがとう、ありがとう……。言葉にできない。今世こそ、アマテラスの国日本、ありがとうと言って肉を離していただけるように……。

アマテラスの国、日本へ……。ありがとう。

46

俺たちは戦ってきた！俺たちは戦ってきた！

腹を切ってきた！腹を搔かつ捌さばいてきた！

俺たちはアマテラスの名のもとに命を捧げ戦ってきた！

日本が好きだ、この日本が大好きだ。

日本、日本、アマテラスの国日本、神国日本。

日本が沈む、この日本が沈む、大好きな日本が沈む。

田池、田池、田池、田池留吉、田池留吉が肉を持った、田池留吉がこの日本に生まれてきた。アマテラスの国日本にやってきた。

何故今更、何を今さら出てきた田池、田池留吉……

我こそが神、我こそがこの日本を世界を宇宙を支配してきた。

アマテラスがすべて、アマテラスに心向けよ。

田池、田池留吉……お母さん、おかあさん……

日本が……この島国日本が沈む……アマテラスが崩れていく……

やっとやっとこの日本に田池留吉が肉を持ち真実を伝えてくれた。

日本というこの国に田池留吉が肉を持った。

お母さんありがとう、やっとやっとアマテラスと共に田池留吉のもとに集えることができました。

お母さんありがとう、田池留吉、アルバート。必ず二五〇年後につないでいきます。

47

子供の頃から、母親の田舎が奈良であった為「大和やまと」と言う言葉が大好きでした。

盆と正月に家族で田舎に帰る時をいつも楽し

みにしていた幼少の頃を思い出します。

帰りがかった帰りがかった、あの故郷へ。私達の故郷、大和に帰りがかった。

懐かしい懐かしい、温かいお母さんの懐。自然、溪流、池、全てが優しくかった。

飛鳥、卑弥呼の時代、熊野街道、過去より肉をいただきてきた縁ある場所に今世も計画通りに肉をいただきて

きました。全ての過去を忌み嫌い、あつちへ行けどどれだけの思いで蹴散らかしてきたか。肉の世界しか信じられない冷たい自分でした。沢山の苦しんで



た自分、特に巫女の自分を自由にしてやりたい、未だにこの心の中で戦いを続けている沢山の巫女の思いに、優しい母の思い、温もりを伝えていきたい、いきます。ありがとう、日本。私達の苦しい思いをこんなにも温かく受け入れ、包み込んでくれているなんて、ずっとずっとわかりませんでした。あなたがしてくれた様に、私もそうできる自分に蘇っていきます。日本へ……今までありがとう。

48

日本に思いを向ける……。

懐かしい、懐かしい……。懐かしい思いがあふれてきます。何度も何度もこの日本の地で肉をいただきました。アマテラスの意識とともに、何度も転生を重ねてきました。

- ② 日向ひゅうが—足摺岬あしずりみさき—室戸岬—伊雑宮
- ③ 伊勢神社あきじんじや—阿紀神社—伊雑宮
- ④ 出雲大社—六甲山石宝殿—伊雑宮
- ⑤ 竹生島—矢田宮（熱田神宮）ふけこうたつだいじんじや おしやまじんじや—布気皇館太神社・忍山神社—伊雑宮
- ⑥ 真名井神社いつきのみや—斎宮—伊勢神宮
- ⑦ 神島—伊雑宮—紀伊大島……等々。

他にも伊雑宮の神紋、籠目紋の由来はユダヤのシンボルマーク六芒星であり、更にこの伊雑宮を伊勢神宮の内宮・外宮と、丹後の元伊勢の地「籠神社」「天岩戸神社」などを地図上で真上から見下ろし、レイラインで結んでいくと「六芒星」ろくぼうせいの形になる！など……まだありますがこれくらいで。

何かよく分かりませんが、兎に角どえらい場所で学びが進んでいるということですよ。

五年前に櫃原セミナーで田池先生が「これから学びは伊勢に向かいます。」と宣言されたけど、でも実際はホールもふるさと苑も志摩市だよなあ……伊勢市じゃないよね。と素朴な疑問を感じていましたが、何と云いますか、ああ志摩でいいんだなど妙に納得しました。

ちょっと話が大きくなりましたが、ここ志摩での他力の根深さを感じることはまだたくさんあります。それはまた後の話で。



伊雑宮について

一昨年に志摩市内へ引っ越し、そこでの生活も三年目に入り志摩の環境や空気にも馴染み、地元の方たちと交流する中で少しずつ色々なお話を耳にするようになりました。

その中で最も衝撃的だったのは、伊勢神宮は本体ではなく実は志摩市磯部町迫間上之郷にある伊雑宮こそ本体であるとお話でした。

ちょっと調べてみるとこの伊雑宮には色々な不思議な話が幾つもありました。「玉手箱伝説」「七本鮫と竜宮伝説」「レイライン」「先代旧事本紀大成経事件」など。

先代旧事本紀大成経事件（1679年・延宝7年）は簡単に言えば、伊雑宮こそが天照大御神が鎮座する正宮で、内宮は星神、外宮は月神が鎮座する社とする先代旧事本紀大成経という書物が一般に出回ってしまい大騒ぎになり、幕府は関係者を肅正・追放に処する悲惨な結末になった事件です。この書物はあの聖徳太子が編集させ、その後世に出ることなく封印され続けていた代物のようです。

そりゃ常識として罷り通っていることを崩されるのは、価値観が根底から覆る訳ですから大損害を被る輩にとっては全力で無かったことにしますよね。現代でも似たようなことは多々あります。

伊雑は元々は伊蘇で、伊蘇の意味は「天地を仲介する人が蘇る」、つまり伊雑宮は天地の仲介者復活の神社ということらしい。なんか凄い。

伊雑宮が実は日本の中心だったのでは？を後押しするのがレイラインです。レイラインというのは、古代の遺跡や神社・仏閣、巨石群などを地図上で線で結ぶと直線状になるラインのことです。

複数のレイラインが重なり、中心地として交差するのは伊雑宮です。ここまで多数の指標と結び付き、しかもそれらの中心に位置する神の宮は他にないようです。伊雑宮を中心とするレイラインを幾つか記しておきます。

① 佐多岬—熊野本宮大社—伊雑宮—富士山

桜

私が結婚で大阪を離れるまでよく行った、お気に入りの場所。大阪の住吉区にある万代池公園。

雨降りの日の満開の桜は感動的だった。

木々と池のある素敵な場所。

春になったら、久しぶりに出掛けてみたい。



万台公園の桜

娘の原稿です

私は学校が大好きだ。特に私の教室が一番好き。

教室のベランダからは左に海が、真正面にグラウンドが、右に道路が見える。その景色も好き。

朝早く学校に行き一人で教室でいるのも好き。

だけど教室にクラスの子と担任の先生が皆集まっている時の教室はとても楽しく、また明日も学校があると思うとうれしくて仕方がない。

私は皆と教室にいるのがうれしい。



志摩市 国府の浜

大阪から志摩へ

大阪・玉江橋

私は20代半ばだった頃、この学びに出会った。

それから間もなくして夫となる人と、セミナーで出会った。

当時、私が働いていた場所と夫の実家が近かったこともあり、その日、私の職場に顔を出すかも……ということになっていた。

私の心は朝からソワソワしていた。

職場に向かうJR環状線の中で、株式会社エルから毎月出版されていた「エルランティの光」を読み、JR福島駅で下りてなにわ筋を堂島川まで歩き玉江橋を渡る手前で、私の中から、「今日、来ても来てくれなくてもいいんや」と思いが出てきた。

私は、「そうなんや」と、納得した。

結局、その日、彼は職場に現れて、夫になってくれた。

ふたりの長い時間が流れた今は、くそやろう同士の関係だけど、残された時間、本物の「学びの友」になれるようにやっていきたい。

夏の思い出

夏の日、仕事が終わって外に出ると、もう外は暗くなっていた。

ビルとビルのあいだから花火が見えた。



「あっ、花火！」

「今日は天神祭や！」

堂島川のベンチから少しだけ見えた、天神祭の花火。

ほんのひとときの癒しの時間。

同僚とふたり仕事の疲れを忘れた。

アマテラスとともに帰りたかった。懐かしい母なる宇宙の中に帰りたかった。しかし、どうしたらいいのかわからない、転生てんしょうを重ねる度に、暗黒の宇宙を広げていきました。アマテラスのパワーを我が物に、私の宇宙は素晴らしいとブラックのエネルギーを宇宙にまき散らしてきました。

日本は待つてくれています。帰っておいでと待つてくれています。自分の姿かたちが崩壊していこうとも、喜びとともに帰りましょう、いつまでもいつまでも待つていまずと私たちを信じてくれています。

やっと出会えました。待つて待つて待ち続けたきたたくさんの宇宙の友がいます。分からないから外へ外へと求め続けてきました。帰るところは私自身でした。アマテラスも日本もみんな一緒、ひとつで愛へ帰る。そう信じられることが本当に嬉しいです。

49

まず、このタイトルに向けて瞑想をしたら、「お母さん、ありがとう。ごめんなさい。」と「クソ田池！死にさらせ!!」という思いが、涙とともに溢れ出てきた。

お母さん……やさしい……やさしい……ありがとう……

日本が沈むということは、ふん前から、心の記憶というか、心に響いてきたことがあって、心で納得できるというか、信じられるという思いがあった。

そのとき感じたことは、アマテラスが母のやさしさにふれて、自分の世界の冷たさ、間違いに気付く「もういい、もういい」という思いの中で、

アマテラスの世界が崩れゆくことにともなうて、日本が沈んでいく様子を、「もういい、これでいい、ごめんなさい、ありがとう」と悲しみや苦しきではなく、清々しい思いで見つめ、そして、消えるのではなく、何か大きなものに溶け込んでいくというか、喜びで帰っていくようなイメージを唐突に突然感じたことがあった。

きつとそうなんだとどこかで信じられた。肉の自分もその方向に学んでいかなければと思ってきた。

何となく感じていたことを文字にする機会をいただきましたまして、ありがとうございます。

50

ブックさんの連絡事項を読んでいて、ああ、

日本への原稿かあと思ったら、思いが込み上げてきて、送ろうと思いました。

ずっと肉では、日本が沈んでいくことを、受け入れられずに来ました。

何故か。

この素晴らしい日本が沈んでいくことは嫌だ。敵だと思っている韓国や中国から、ざまあみると思われることが嫌でした。

ずっと、こちらのほうが上だと思っているのに、ざまあみろと思われ、その上同情されるなんて、まっぴらごめんとそう思ってきた。

高笑いがとても受け入れられない。
聳え立つ自分の心そのものでした。

しかし、日本へ……の文字を見た途端に、なんとも言えない嬉しさが伝わってきて、ああ、意識は違う、肉とは関係なく意識は知っている

と思いました。

肉は、そんな死に方したくない、逃げられるものなら逃げたい。死ぬことも嫌なのに。ましてや、そんな酷い死に方、と嫌っていました。

けれども、今回ああ、日本が沈んでいく時にその喜びに心を合わせてともに死んでいけたら嬉しいと、初めて思えました。喜びの雄叫びを上げながら肉を離していく。

凄まじい思いを叫びを出し、そしてアルバーと心から絞り出してくる。

ああ、日本、何度も何度も転生を、闇を受け容れてくれました、ありがとう。

肉は恐怖でいっぱいですけど、そう思えたことが嬉しくて、その心を信じてやっていこう

と思います。ありがとうございました。

51

たまたま家の整理をしていたら、二〇〇五年五月のセミナーで田池先生のワンポイントメッセージが録音されたカセットテープが見つかり聞いてみました。

田池先生が「私の目を見て下さい」とおっしゃると、私は「ぎゃあ〜」とひっくり返りました。そのあと塩川さんが「私はすごいんですね」と私の意識を出して下さいました。「そうなんですよ。あなたはすごいんですよ。肉で偉いとかじゃなくてすごいんですよ。今は小さな小さなところでよくよしているけれど、もっともっと大きく大きくなれるんですよ」と田池先生がコメントを下さいました。その時は何がなんだか分

からなかったけれど、うれしかったことだけは覚えています。

十五年経ってようやくあの時の意味が実感できます。いわゆる意識の転回が進んでいくと、どんどん大きくなって無限大に心が広がっていくんですね。「私は意識、永遠、無限、波動、エネルギー。私は母なる宇宙へ帰ります」と思うとすべてにありがとうが出てきます。日本に生まれて田池留吉に出会い、この学びが継続できている私は何と幸せ者でしょう。

日本とアマテラスが愛しいです。日本とアマテラスは愛しい我が子であり、お母さんです。

52

日本。この響き、これまで特段思ったことはなかったけど、私は日本以外住みたいと思ったこと

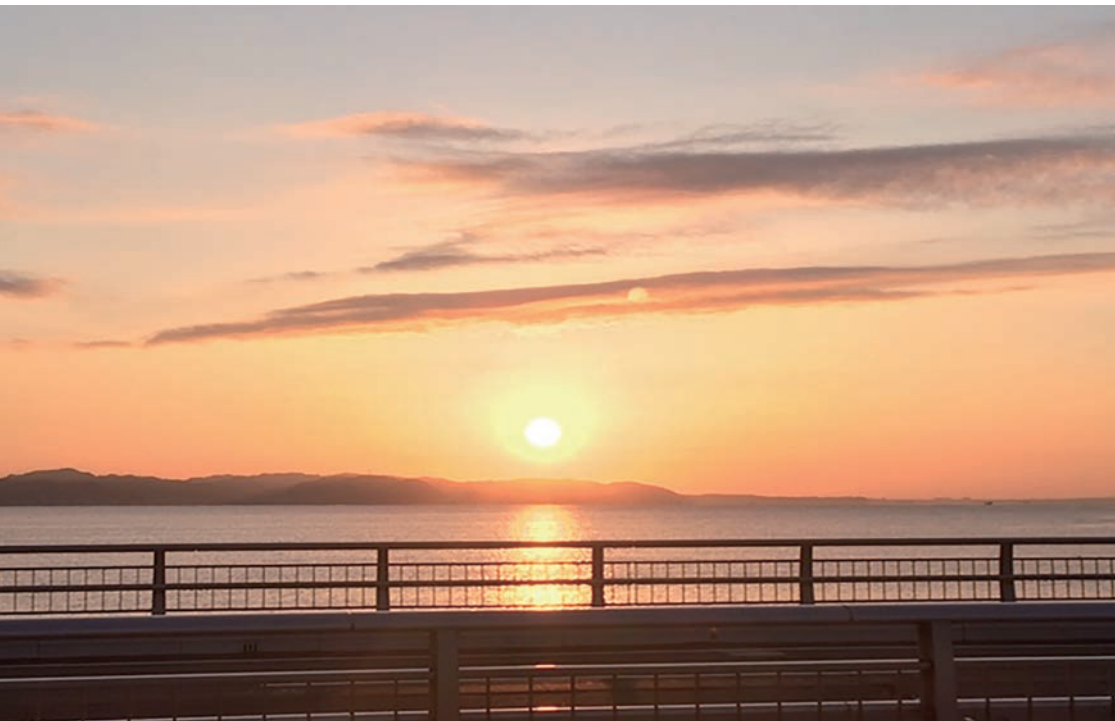
がそういえばなかった。海外の旅も何度か体験していたが、学びに出会ってNY、次元移行最終の地が初めて行きたいと望んだ場所だった。怖いという情報ばかり詰め込まれていたハーレムではなぜか涙が溢れた記憶がある。学び初めて聞かされたいくつかの大陸沈没も日本沈没もドラマ的なまだ荒唐無稽（こうとうむけい）の中になりました。この数年です。やっと自分が住む地も含め環境が愛おしく思えるようになって、私の凄まじいエネルギーの一つ、アマテラスとともに何としても母の温もりに帰るんだという思いがつきあがってきます。ニュージャージー、ハドソン川、ウェッジウッド……すぐさまアルバートと叫ぶ中、まったく脈絡のない「あの時のあなたじゃないの??」が出てきて、うまく表現できないけど田池先生に出会い沢山のことを学ばせていただいて、悔恨（かいこん）も感謝も望郷も何もかも含めて自分の心を知ることが今なおできるこの日本に向けるすべてだと思っています。

アマテラスを思うときに出てくる富士山は、その美しく聳え立つ姿を崩していくことが喜びですと伝わってきた。

日本の国と一緒に沈んでいく富士山。私は子供の頃からいつも富士山を見ていた。広い太平洋と富士山と青い空。いつもそこにあった。その富士山が日本の国と一緒に沈んでいくことを喜びだと言っている。

私は日本に生まれたことが嫌だった。私は日本人じゃないのに日本に生まれたことが嫌だった。だけど今、日本に生まれ、学びに出会い、学びの友とともに学べる今が嬉しいと思っている。

沈んでいく日本。私たちを受け入れてくれてありがとう！今世日本に生まれ、学んだことを必ず思い出します。



小さい頃、母から「日本は春夏秋冬という四季がはつきりしている良い国や。温暖で住みやすい国は日本だけや」と言われ、「そういうものか。日本は住みやすい良い国なんや」と子供心に思っていました。

しかし今、日本を思えば苦しみしかありませんでした。

地獄の奥底を這いずり回る壯絶ぞうぜつな苦しみを味わった国、日本。

人々の心は右へならえ、年功序列、滅私奉公めつしほうこう、こんな日本、日本人が嫌いで嫌いでたまりませんでした。

「もう限界だ、もう限界だ！」と自分の心も日本も絶叫しています。

心をひたすら押し殺し、己の欲望のみに生きる日本人に、日本は噴火していく。

怒り、悲しみ、怨念おんねん、呪い、苦しみが真つ赤な

溶岩と共に大噴火していく、もう間もなくです。

その時、阿鼻叫喚あびきょうかんの中で苦しみ続けた意識は何かを学んでいくんだと思います。

これが人生を生きるということの本当の意味でした。

虚むなしい、寂しい、悲しい、不安と恐怖、怒り狂むう、狂むいまくつてきたエネルギーと出会えています。

苦しいから神に救いを求め、寂しいから神にすがり、ひれ伏し、それでもどうにもならない、どのような方法を使ってもこの苦しみはどうにもならなかった。

田池留吉を足蹴に田池留吉を呼んでいました。

それすらも分ならず私は学んでいると思っていました。

「ふざけるな。くそ」凄まじいエネルギーが伝わってきます。

「それでもあなたは愛ですよ」と伝わってきます。どちらか私でした。自作自演、全部全部私の中でした。

私の中には私しかいない。誰もいなかったです。底知れぬ真つ黒を感じます、感じますが少しの真つ黒に出会えたことがうれしいです。

私が最後に選んだこの場所にいられる、この環境で学んでいける、やっとやっと、少しうれしいと感じられます。

一から学んでいける。今までに感じたことのない思いを感じます。

お母さん、ありがとうございます。

56

日本、ありがとう。

と思うと、大宝と出てきた。

大宝、私の大切な場所。

私の中のたくさんの思いを出してくれた場所。

寂しい思い、悔しい思い。悲しい思い。恐怖。

憎しみ。たくさんの苦しい苦しい思い。

私にはこの学びはできないと思って、何度も一

人で大宝を出ようとした。

でも、人の思いや天候やらが私をあのに留ま

らせてくれた。

何年間も苦しんだ。

でも、この学びをやめれなかった。

心の中に学びがあった。

大宝は私を、どうしようもない私を受け入れて

くれた。



今、やっと自分の間違いに気付き始めていこう
とされています。

大宝、ありがとう。本当にありがとうございます。
ます。

57

私には生まれ故郷の府中。小学生まで住んで
いた大宝と今住んでいる志摩。どこも大好きだ
し思い出も沢山ある。だけど私は日本に思いを
向けると今住んでいる志摩が出てくる。最初来
た時はこの場所が物凄く嫌いだった。なぜだか
は全く分からない。ただただ嫌いだった。だか
ら私の心の中は「なんでこんなところに住まな
くちやいけないんだよ」「なんでこんなに嫌いな
場所の中学校に行かなければいけないんだよ」
と志摩のことは見下していた、それに愚痴文句

ばかりだった。だから新しい中学の入学式は苦痛でしかなかった。それからしばらく毎日家に帰っては学校のこと、友達のこと、部活のこと他にも沢山のことを親に愚痴りまくった。本当にこの志摩という場所が嫌いではなかった。だが中一の二学期中間からその気持ちが変わってきた。なぜだかはその時はよく分かっていなかった。でも今になると少しだけだが分かるような気がする。先程も書いたように私は志摩という場所を見下していた。



だけど本当は大好き。本当に好き。この場所に来たかった。と心が言っているようにしか思えない。それほどにそのころから志摩、今住んでいる甲賀、東海中学、自分のクラスに思いを向けると嬉しくなってきた。何とも言えない気持ちになつてくる。私が今まで心を封鎖してただけで周りにいる人、学校、家、阿児町、甲賀はずっと私の心が解放されるまでずっと待っていてくれたんだな、と感じる。私が少しでも皆待っていてくれた。ずっと待っていてくれた。本当に嬉しい。何とも言えない

この感情。本当に感謝でしかない。そう感じるようになってから学校に行くのが物凄く嬉しくなった。楽しいのではなく嬉しいのだ。心から嬉しいという感情が湧き出てくる。それにクラス仲が格段と仲良くなった気がする。クラス皆誰と話しても親友と話すような感じで話したり、笑ったり泣いたりすることが出来る。嫌いな人、苦手な人も誰もいない。本当にありがとう。本当にありがとう。毎日が嬉しいと感じます。

58

昨日も今日も日本列島は揺れている。北も南も。ああ本当にこの国の終焉が近付いてきているんだな……。そんな実感が徐々に強くなるこの頃。この国を失う途轍もない寂しさ哀しみ恐怖が心の奥底に蠢いている。だってこの国が大好きだったん

だよ！何が好きって……もう何もかもさ。それら一切合切地球上から消えるんだよ！そんなの人類の大損失じゃないか！こんな最高な国他にある訳ないじゃんか！他に先に失せるべき国々があるんじゃないのか!?なんでよりによつてこの日本が、愛しき麗しき素晴らしき日本が真つ先に消え去らねばならないのか……!!こんなにも懐深き、情に厚く優しき国が滅んでいくしかないのか……。ただただひたすらに思慕の情が高ずる。無念。最早是まで。ああ、何度この国に生を受けたか。その都度地獄の苦しみは幾度となくあつたと思う。けれどこの国の四季と自然の美しさ気高さやさしさは変わることなく自分を受け入れ迎え入れてくれた。この国のお母さん、母上、母堂、母君、かかあ、おふくろ、お母ちゃん……。この呼び方は日本のあたたかみと同じ。母国、故国、祖国。日本は母なる国。帰らずにはいられない国。全軍、これより日本へ帰還する！日本へ帰ろう！

教えられたのですが、単独で出かけたものの、とても見つかるものではありませんでした。

そこで、日を変え、鳥羽市観光課に救いを求めました。

場所を教えてもらうだけでよかったのですが、「一人では無理です」と、鳥羽市観光課の方が、海女修行中の写真家の女性「海女ちゃん」と一緒になって案内して下さることになりました。



海女ちゃんと細木さんご夫婦に話を聞く

まずは3人そろって、漁港の長老・細木さんに石鏡漁港についてお話を聞き、ついで問題の「旧石鏡漁港」のあった「大木浜」を目指します。その場所は、今は海女の聖地になっており、漁労権や密漁の問題があって、詳しく紹介することはできませんが、山道を小一時間も下った隠れ浜のようなところ。この地を掘ったとき、たくさんの鯨の骨が見つかったと言います。

さていよいよ本題ですが、この石鏡漁港が、なぜ、今の地に移ったのかというと、それは江戸時代後期に起こった「東南海地震」に起因しています。俗に「宝永大地震」



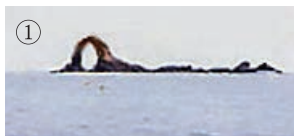
ゴジラに登場した大木浜



かつての石鏡漁港（大木浜）／密漁防止のため目印になる建物の撮影は禁止されました。

石鏡漁港と宝永津波

三重県の鳥羽市に「石鏡^{いじか}」という町名が残されています。この「石鏡^{いじか}」という名前の起こりですが、石鏡漁港の沖合い1キロのところに「石鏡島」という小さな島があります。1959（昭和34）年の伊勢湾台風までは、この島は、石鏡神社^{いしかがみじんじや}の絵馬にあるように、島の真ん中にポツカリ丸い穴が開いた「円鏡」のような形をした島でした①。その丸い穴の部分を通してみる海の景色がまるで鏡に映された景色のようで、これが石鏡島の名前のいわれだと伝えられています。



ところが伊勢湾台風で、上部が高波に削り取られ②、二本の柱のような島になり、それがさらに船の座礁によって、左柱部分が欠損し③、写真にあるような今の形になったと言います。

さて、そんな石鏡の名前が付けられた「石鏡漁港」ですが、昔からこの場所にあったわけではありません。江戸時代後期になってこの場所へ移ってきたと言われています。

この石鏡漁港には、海に面して「漁業協同組合」の事務所があり、ここに「鯨船^{くじらぶね}他^ほもやい申定^{もうしじだめ}之事^{こと}」という捕鯨に関する掟書^{おきてがき}が残されています。つまり石鏡漁港は、江戸時代の捕鯨基地であり、その場所も岬を一つ回った「大木^{おんぎ}浜^{のはま}」というところにあったというのです。

この「大木浜」は、映画「ゴジラ」（第一作）が撮影された場所でもあり、その関係から「ゴジラ浜」とも呼ばれています。

漁港にある「西村食堂」の親爺さんに尋ねると「すぐ行ける」と気軽に

石鏡漁港と宝永津波



三重の鯨船（鳥羽市海の博物館蔵）

（1707年10月）と呼ばれていますが、この地震に伴う大津波で、志摩、鳥羽は言うに及ばず、東海、近畿、四国、山陽の海岸部が壊滅状態になりました。

この結果、三重、和歌山（太地）、四国（高知）の捕鯨業が壊滅するに至ったと言うのです。

太地や高知については、大阪の穢多村（^え 非人集落）との結びつきが強く、その頭である太鼓屋又兵衛の資金提供で復興が可能となりましたが、三重の捕鯨業については、この宝永地震以後、復活することはありませんでした。こうして捕鯨業で栄えた石鏡漁港および石鏡の集落は壊滅し、今の石鏡漁港へと移動してきたと言われています。



鳥羽から志摩にかけての捕鯨業の名残は、今も相差という村の「鯨まつり」として残されてり、毎年7月14日になると、相差の魚港には「張りぼて」の鯨の親子が担ぎ込まれ、祭りのクライマックスには、若い衆にかつがれ海へと入っていきます。こ



こでも子鯨を^{おとり}囷に母鯨を捕らえる捕鯨法と、それに対する後ろめたさが、母鯨の母性愛に対する驚きの思いと共に残されておりました。

我が祖国日本へ!! 万歳! 万歳! 万歳! ……もう帰るところが無くなるのか……。あの日本の国はもう無いのかい? じゃあ俺は俺たちはどこへ帰ればいいんだよ! 日本じゃなきゃ嫌なんだよ! 日本は俺の、俺たちの唯一の祖国なんだよ!! 例え平和ボケでもなんでもいいからただ存続してほしかった……。打ちひしがれる程の寂しき、虚無感。……でもね、別れの時が来たんだ。こんなにも好きで好きで堪らなかつた国、日本国、大日本帝国、日出国。国土は小さいけれど懐深く裾野が広い国、まるで富士のようだ。富士の山は日本そのものの。日本の象徴。しかしもう役割は終わったんだ。必要なものは表れて、必要でなくなれば消えてゆく。自然の摂理。嘆き悲しんで別れるのも別れだ。ありがとうと万感の思いを胸に別れるのも別れだ。同じ別れなら後者でありたい。「海ゆかば」が心に流れる。さようなら日本、ありがとう日本。あなたのおかげで今世にしてはじめて本物

の道標みちしるべに出会えました。悠久の過去から間違え続け、間違つたまま生き死にを繰り返すしかなかつた自分の生き様を変えねばと、この国日本に決死必死の思いで生を受けました。決死隊必死隊の気持で覚悟で生まれてきたんですね。ありがとうございます。やはり日本は優しいです。今世本当にお世話になった日本の土地土地を思います。大阪市内、鹿児島県出水郡、京都市左京区、東京三鷹・武蔵野・練馬・杉並・日野市、大阪大宝、そして志摩。その他、仕事で周った沖縄を除く全ての都市・町・村。東西南北津々浦々今世だけでもくまなく巡ることができた。最後の日本へのある種巡礼だったのか……。日本の地方、田舎は「故郷」の唄がよく似合う。兎追うさぎおいしかの山、小鮎釣こあなづりしかの川……。ありがとう故郷、ありがとう日本。ともにともに帰ろう、遥はるかか彼方かなたの故郷へ、本当の故郷へ帰ろう! 仰げば尊しわが師の恩……日本は故郷であり我が恩師。大変大変お世話になりました

た。ありがとうございます、長い間本当に長い間ありがとうございます。

59

今回のテーマ、「日本へ」ということで、こちらに思いを向けてみました。

ああ苦しかった寂しかった、間違ってきた間違ってきた、帰ろう帰ろう、帰りましょうおかあさん、帰りましょう帰りましょう、私たちは帰るんです、ありがとうございます、そんな嬉しい思いが上がつてきました。

ですが、日本が沈むと思った時、上がつてきた思いは死にたくない、助けてくれ、ああ私は死にたくない、助けてくれ、私は生きていたいんだ、ああ私を見捨てないでくれ死にたくない

死にたくない誰か助けてくれ——そんな冷たくて苦しい、肉にしがみつく思いでした。

60

日本へ思いを向けてみると子供のころ過ごした場所を懐なつかしく思い出します。

住んでいた地域の自然はきれいだったな。子供の頃は海外で行ってみたいところはありませんが、大人になってからはその思いも薄れたようです。

やっぱり日本が好きです。

大好きな場所で真っ黒い思いを流してきたんだと思うとごめんなさいがありません。

生まれてこの方、何故日本に生まれたのか考えたことはありません。

友達とそのような話もしたこともなく、この

学びを学んでも余り深く考えたこともありませんでした。

今は、腐りきった世の中に文句を言っている自分がいます。

自分はこんなにも真つ黒なんだと見せられています。

日本が沈んでいく。「日本沈没」を思い出します。恐怖心が出るのでしょうか、それとも素直に田池留吉を思えるでしょうか。

日本での転生てんしんがあと何回あるか分かりませんが、二五〇年後を見据え、来世に繋げることができるように心を見ていくだけです。

61

島国、アマテラスの国、日本。

ここに存在していた自分こそが本当の自分
他ならないと思っていた。

この地で数々の転生を繰り返し、そして苦し
みや悲しみ恨みうらみ憎しみ、様々な思いを自分の中
へと封じ込めてきた。戦って戦って戦ってきた。

お母さん、田池留吉とは何なのか……素直に
呼ぶことすらできなかった。

そして、日本の国に肉を持ち田池留吉の肉を
通して真実の波動の世界を知ることができた今、
この肉を持つわす僅かな時間の中で過去からの自分、
そしてこれからの自分と向き合っていける。

自分自身に用意した環境。何のために今、ここ
に存在しているのか、何のために今があるのか。
常に自分に問いかけていきたいと思えます。
ありがとうございました。

小学校の時、日本は元々アジア大陸と地続きであつたが、地殻変動で徐々に大陸から切り離されていき現在の形になった、と聞かされたとき、とても不思議な気がした。日本は遙か昔から今の状態で存在していたと信じきつていた。この感覚が大きく揺らいだのは、二十代の時に小松左京作の「日本沈没」を読んだ時だった。その内容は衝撃的で、日本が沈むのはそう遠いことではないと本気で考えた時期があつた。それから二十数年、田池先生の口から「五十年先は日本は海の底」という話が出た時、あの衝撃が蘇よみがえった。瞑想で天変地異に思いを向けるたびに、日本への愛おしさが増してくる。一方で、何ともいえない切ない思いが沸いてくるが、やはりアマテラス日本に肉を持たせた事、今はありがとうしかない。瞑想で日本へ思いを向ける

と、日本で仲間とともに勉強してきた事がどれほどの宝物であつたか心に染しみみるこの頃である。



故郷の海、山、真つ赤な夕日がおおきく、美しい景色のなか小鳥が飛び立つ優しい風景、故郷を思えば涙があふれ、お母さん、ありがとう。お母さん、ごめんさい。生まれてこれてよかったです。学びに出会えてよかったです。こんなに優しい景色、思いの中で、くるっている事すらわからず、寂しい寂しいと、小さく小さくなつて後ろを向き固まつていった私に、「待ってますよ。帰って



くるんですよ」と伝えてくれました。形を見てばかりだったと思います。思うこと、感じること、喜ぶことをないがしろにしていました。ありがとうございました。

63

日本へ……と思いを向けていくと、「あの時のあなたじゃない？」という、いつかの塩川香世さんのメッセージの中の一文が思い浮かんで、二五〇年後の私が、日本という国を思い出しているという感覚です。その時には日本という国は海の底に沈んでいます。そして、そのことを思い出していくのは、二五〇年後の私です。

日本という国へ生まれてきたことについて、

一度も疑問は持ちませんでした。学びに出会い、ある時期から日本という国になぜ生まれてきたのか、田池留吉の肉が生まれ育った土地がなぜ大阪だったのかと言われるようになり、歴史、地形等々にうとかった私は、そこで言われていることを頭で理解しているという感じで何となく分かったつもりになって、の時期がかなり長かったです。

アマテラスの国、日本、そこへ生まれてきたその意味を、少しずつでも心で感じるようになり、今住んでいる場所と、以前住んでいた場所、ひいては生まれた土地と今住んでいる場所、それが偶然住んでいるのではなく、何らかの関係性がある。しかも上町台地とも無関係ではないことも知り、地震国日本に生まれ、アマテラスの供養をしていくこと、それを決めてきた自分の思いに沿って、日本を思います。ただ恐怖と

呪いだけで死んでいったたくさんの方がいます。沈みゆく日本を目の当たりにすることは私の時代にはないでしょうが、日本という国を思い出すということになれば二五〇年後です。かつて日本という国があつて……と、懐かしく思い出すでしょう。というのが今の私の思いです。ありがとうございます。

64

日本と思うと嬉しい、懐かしい、いとおしい、噴火、喜び、かけがえのない時間。

好きな日本の国、アマテラスの国、卑弥呼、巫女、遊女。

自由になりたかった、空を見上げ大空を飛ぶ鳥をうらやましく泣いた。

幸せになりたかった、幸せになれると信じた、

すべてが偽物の嘘。

何の為に生きるのか、真実を探し求めた。

日本の国、田池留吉、真実の波動。

ありがとう日本、ありがとう田池留吉。

再び出会えるその日に日本の国を見ることはできなくても、すべてを思い出す、すべてを教えてください日本、ありがとう。

65

日本へ、日本へ、あー日本よ！

多くの民と多くの意識達を受け続けてくれた日本よ。

私達とともに母なる宇宙に帰る意識よ。私達の心は日本とともにありました。

多くの闇を吐き出させていただきました。苦しく、悲しく、凄まじい多くの多くの闇とともに

日本列島は、ジグソーパズルのごとくバラバラになって消えていく。

それを見ている人々は何を思うのでしょうか？

あー日本列島よ！まもなく消え行く日本列島よ！ありがとう。

ありがとう。ただただありがとう。私はうれしかった。

田池留吉とともに学んだ日本よ。

私達の受け皿になってくれた日本よ。本当に本当にありがとう。

あとは、日本という国があったのよ。と語り継がれるばかりになってゆくのでしょうか？

そうです。昔アトランティスという大陸が沈んだという伝説のように、そう語り継がれてゆくのでしょうか？

アメリカ大陸は待っています。今か今かと待っています。

ともにともに母なる宇宙に帰りましょうと待つ

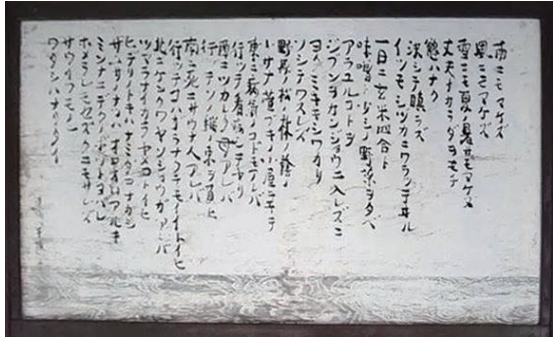
手っ取り早くがいい」と思ったが「はい！」と裏腹な返事になりました。そして「電話を切り直ぐペン持ち、出てきたものを送ってよこしなさい」……と。

しかし何のことやらとしぶってたら「兎に角^と角^{かく}しなさい！ やってみなさい」と。言われた通りペン持ったらノートにスラスラ勝手に走り、何やら文字が不思議な感覚でした。追っかけ読みしたら「オマエはいつだってそうだ、今度はオレ達も連れてってくれるんだろうな！」云々。

オレ達って誰！ 連れてって何！

目にしたとたん、ペンがパタッと止まりました。まだ知識も無い時でそれから今に至ってます。

正しく敏感に……そうでした。



ふるさと「ともにともに帰ろう〜♪」

でした。

「ありがとう〜ありがとうございます」と、心から心から湧くような思いには、まだまだの現状です。

「岩手に関するコラムを書いてみませんか」と、お話し頂いた2月3日は奇しくも71歳の誕生日。

心と肉で抱えてるモノを整理整頓せねばです。

この日本に生まれ……この日本で……

岩手・宮澤賢治、そして自分

近くに「注文の多い料理店」の童話集を出版した「光源社」があり自分の庭みたいな気分になれる所です。

奥のカフェ可否館も、コーヒーを楽しめくつろげる場所です。

近年四季を通し外国人観光客も多く、席を譲る気遣いをしたりで、ゆっくりできず遠のいてましたが、久しぶりに覗いたら、ゆっくりゆったり……。

これもあれもコロナ現象か！！

賢治の「雨ニモマケズ…」だけは目に耳に馴染み深く、まあ～まあ～引っ掛かりながらも出てきます。

「こんなスゴイ生き方は自分にはできない」と思ったものです。

また、理想郷イーハートブの風景の中の「七ツ森」の地名・地域は自分の生まれ育った所です。以前、新幹線の発着に流された「星めぐりの歌」も何とも心地良いメロディーで大好きです。

今まで気にせずにいいましたが、ポイント何かしら関係あるんだと改めて。

今、書いていても……この疼き^{うず}はなんだろう？ 心の奥の苦しさを、言葉に変換できないけれど響いてくるものがあります。

何か言いたいのに言えない、そんな重苦しい心。今の自分、出せない出さない自分です。

この日本、この岩手に生まれ、学びの本との出会いから30年あまり、怠慢な時間の過ごししかたでしたと思うこの頃です。

集う前は変に敏々で大変な恐怖でした。そんな時、まだ顔も知らない田池先生に苦しさのあまり電話しました。「何年かかるか分らんが、この学びしてきなさい」が最初の出会い言葉でした。「何年もかあ～



て待つて待ち続けていただいた私達は必ず必ず帰ります。アルバートとともに喜びの中へ愛の中へ帰ります。日本よ、ありがとうございます。

66

日本に向けて

あー、日本、ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。

「ありがとうございます」の思いしか出てきません。

たくさんのたくさんの暗い思いを出してききました。

そして受け入れてもらいました。

そしてそして、タイケトメキチに出会わせていただき、歩みはなかなかなかなかでしただけど、真実を教えていただきました。

今は無き日本ですが、お母さんの懐ふとこころでした。

深い深い懐を思います。

全て全て受け入れていただきました。

本当に懐なつかしく懐かしく感謝の思いしかありません。

67

日本、日本……懐かしい日本……

来世、たぶん、目にするのは、桜。

チェリーブロッサム……、サ、ク、ラ……花び

らが風に舞っている……

私は涙し思う。

……私たちは、日本の国に生まれ出会っていた

……

懐かしい、ふるさと、青い空、山、川、水、空

気……そして、富士……日本。

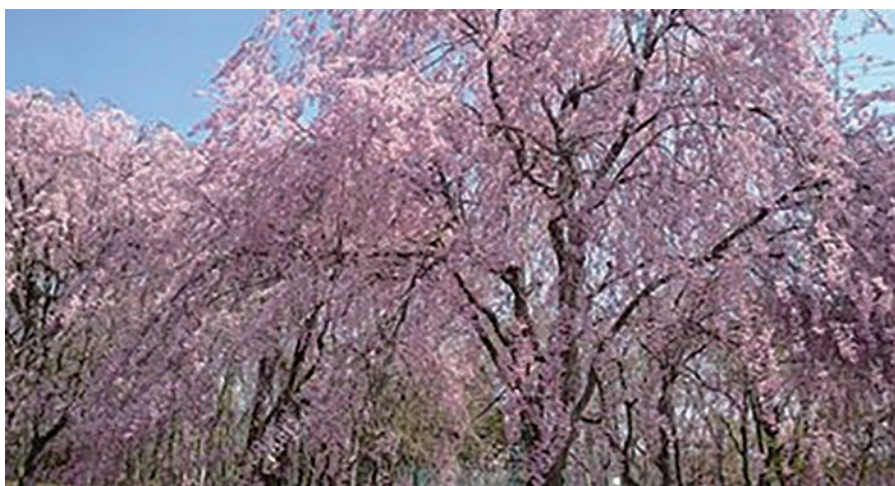
「日本」と、思いを向けると、エネルギーは、アマテラスが出てきます。

今まで、セミナーの瞑想がどうしてアマテラスなのか、よくわからないまま、ずっとアマテラスと向けてきた。

あー、私たちは、アマテラス、アマテラスの意識だったのですね。

私たちは、アマテラスでした。

はい、崩れていきます。形を変えて参ります。アマテラスは喜びでした。この国に、タイケトメキチが肉を持ち、真実の波動を伝えてくれた……私たちは、思い出しました。本当の自分の姿を、真実の波動を思い出しました。申し訳ありません。私たちは、間違ってきました。そのエネルギーを喜びで吹き上げ、そして、形を崩して参ります。それが計画でした。意識の流れの計画でした。そこに肉を持ってきました。ありがとうございます。お母さん、ありがとうございます。ここに、



同時期に肉を持つて参りました。

私たちは、喜びで崩れて参ります。崩れ去っていくことは喜びです。ありがとうございます。

68

肉、形の世界がすべてだと、いつの世に生きてもあなたの中に^{すそ}浸まじいエネルギーを流し続けてきた私でした。

自分の心を見るために生まれてきたのに、外にばかり心に向け、頂点をめざして競い^{きそ}合い、戦い、破壊を繰り返してきました。

心は苦しみ苦しみのたうち回って、自分を切り捨て、孤独の淵^{ぶち}に落ちていきました。

どんなに生まれ変わり死に変わりしても、私の心を牛耳^{ぎゆうじ}ってきた意識がありました。

それは、アマテラス……。私の中のアマテラスは疲れ果て、心から本当の愛に帰りがつていました。

アマテラスの心の底からの慟^{どうこく}哭が、今世この日本で、田池留吉と出会わせてくれました。

真実と心を見ることを伝えていただきました。アマテラスとともに帰ってきなさいと伝えていただけました。

岩盤のような他力の心は、今もなかなかですが、心を見て、アマテラスの思いに気づいていける事が嬉しいです。

本当に長い学びの時間が必要だったけど、これからも諦めずに、私はアマテラスとともに自分の心を見つめながら、残りの人生を生きなおしていきます。

この日本の地に流してきた凄まじいエネルギーを思い出しながら、今私は、初めて自分が

望んだ生き方をしているんだと思います。

喜んで生きていきたいと思いました。

日本よ、ありがとうございます。そして、

ごめんなさい。

そんな思いを流して生きていきたいです。

69

アマテラスの国、日本。もうここにはないけれど、日本と聞くととても懐かしい思いが出てくる。日本。とてもとても懐かしい場所。

日本という国は、アマテラスそのものでした。日本はアマテラスそのもの。それが日本でした。私たちはあの日本に肉を持たせてもらいました。

鬮い、隠蔽。表面だけは整えて、中はものすごいエネルギーが渦巻いていた。そんな中に肉

を持たせてもらいました。

すべて自分の思いを見るためでした。私は自分の肉を自分だと思い込みました。そうではなかった、そのことに気がつくまで、私は何度も何度も転生の機会をいただきました。アマテラスの国、日本で。

日本にはたくさん仲間がいました。あの時、私たちはともに、ああ、あの日本で、学ばせていただきました。懐かしいです。田池留吉、アルバイト。今、そのことが現実となっています。

日本よ、ありがとうございます。私たちは本当に間違い続けて、この地でたくさんのお時を過ごさせていただきました。愚かな私たちを受け入れていただき、ありがとうございます。あの時の日本が田池留吉という意識の流れを伝えてくれました。

来世の私は私に伝えます。

あれは三十年以上前のことです。

町田の会社の小さなロビーで、田池先生が遠くを見るような目で夫に言われました。

「あんなあ、死ぬときはニュージャージー、ハドソン川が見えてる。」

若い人に囲まれて死ぬねんなあ。」

何のことか、よく分からなかったです。

でも、死が近づく年齢になってきて、先生のお言葉が心に蘇よみがえるのです。

どういう経緯か、なぜそうなるのか、何もわかりません。

真意も理由も分かりません。

でも、そちらの方向になるのかなあって少し思うのです。

自分が生まれ育った日本。

こんな題材を頂くまで、当たり前前の存在でした。

「隣の芝は青い」という具合に、他の国の良さばかりが見えていて、若い頃は自国の日本を嫌ってきた私でした。

あつて当たり前前の日本でした。

でも、この当たり前前に住んできた日本が沈む。

そんな日が訪れること。

それを思うとたまたまなく愛しい国だと思おうのです。

この国に生まれて、田池先生とお会い
できました。

それは、とても大きな大きな出来事
でした。

長い闇だらけの転生てんしょうの中で、大きな転
機を頂いたので。

これから、どうなるのか真っ白なまま
です。

私は愛です。

どこの国かで死を迎えるまで、この真
実まことだけを携たづなえて生きていきたいです。



いいのだが……」と言葉を濁す始末です。

てきめんホテルに帰るなり、担当者から電話が入りました。明日は欠航の可能性もある、船が出るとしても時間が遅れそうなので、明日の朝は連絡するまで、ホテルで待機してほしいと言うのです。

釧路まで来て、観測船にも乗れずに帰るなんて最悪です！

幸い、翌日は海は荒れ模様でしたが、1時間遅れでなんとか船は出るようになりました。しかし、揺れはかなりのものです。高速走行しているときはいいのですが、速度を緩めたり停船したときは、手すりにしがみついていないと立ってられないほどです。

まず目についたのは海鳥です。僕にはカモメやアホウドリぐらいしか分かりませんが、このほかにも「クロアシアホウドリ」や「コアホウドリ」「ウミネコ」「ミツユビカモメ」などが、この航海で観測されました。

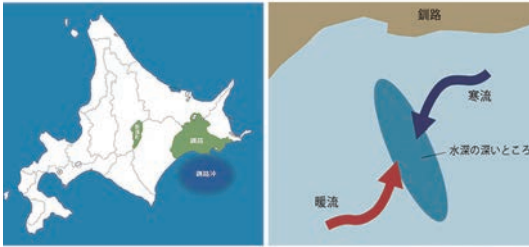
また荒れた海をものともせず、アザラシなのかオットセイなのか、愛嬌たっぷりにプカプカ浮かんでいる姿を見つけました。人に教えられたのではなく、自然の中で、まるで見る人間を意識しているかのように愛嬌を振りまいてくれる姿は、一見の価値があります。

そうこうするうち、シャチの群れが遠望されました！ 船が群れを目指しスピードをあげます。

シャッターを切る連射音、乗客の喚声、まるで船全体が一つの思いに包まれたかのように、シャチの群れにと思いが集中していきます。



釧路港と釧路フィッシャーメンズワーフ M00



毎年9月下旬から11月上旬にかけて、釧路沖にはたくさんの海洋生物が姿を見せます。というのは、釧路沖の海底は、沖合15キロメートルあたりから急激に

深い谷のようになっています。これをくしろかいていこく釧路海底谷と言うそうです。最も深いところで、水深は5000メートルにも達すると言います。

秋口になると、流れが変わった「寒流（親潮）」と「暖流（黒潮）」が、この海底谷でぶつかります。その結果、海水が湧き上がる湧昇流ゆうじやうりゅうが発生し、深い海底に生息していたプランクトンなどの豊富な栄養が、この湧昇流にのって海面近くまで昇ってくるというわけです。

このプランクトンえさを餌とする小魚が集まり、小魚を餌とするイルカやクジラや海鳥が集まり、そして、イルカやクジラを餌とするシャチがやってくるという次第です。この時期、釧路沖は「食物連鎖しょくもつれんさ」の一大舞台となるわけです。

この釧路沖の海洋環境や生態系に関する研究成果を普及する目的で、海洋調査観測船に一般希望者の乗船が許されることとなったのです。かくいう私も早速に申し込み、運よく乗船が許された次第です。

出港前日は、釧路港を見下ろすホテル「La Vista 釧路川」で一泊し、翌早朝の乗船に備えることにしました。ここなら観測船が出船する港まで歩いて5分で行けるというわけです。チェックイン後、夕食を兼ねて、明日の集合場所である「釧路フィッシャーマンズワーフMOO」を下見に出かけました。

親爺が船乗りだった関係で、幼い頃から船に乗せられ、そのおかげでしょうか、船酔いというものを知りません。しかし、明日の海は荒れそうです。MOOで夕食をとっているとき、店のマスターと明日の天候について話しましたが、マスターも「明日は荒れそうだ」と同意見。最後には「船が出れば

は、連れ添いの痛みを共有できる存在とも言われます。

映画「フリーウィリー」(1993)では、母親に捨てられた少年と、家族から引き離されたシャチが心を通わせるというストーリーですが、映画化に当たって、主役のウィリーを演じたのはメキシコの水族館に所属する「ケイコ」というオスのシャチでした。ところが、映画が公開されるや、世界中の子どもたちから、「ケイコを海に返して！」という運動が起こったのです。撮影終了後、狭い水槽の中で、皮膚病にかかり苦しむケイコの姿を、世界中の子どもたちが知ってしまったのです。



といて、そのまま海に返しては死ぬしかありません。訓練されたイルカやシャチは自分でエサが採れなくなっています。彼らは、水分をエサから採るため、エサを食べないと脱水症状になって死んでしまうのです。

ケイコのために巨大なプールが用意され、ここで皮膚病を治療し、エサを自分で採れるようにして海へ返すのです。子どもたちの声が一頭のシャチを救うという奇跡となり、今度は映画の中ではなく、実社会の中で起こりました。

ただ結末を言うと、ケイコは野生の群れに入れず、何度も人間のもとに帰ってきました。それでも、あきらめず野生へ戻そうとする人たち。結局、ケイコは2003年12月12日、急性肺炎にかかり、野生にも戻れず、人間のもとへもかえてこれず、ノルウェーの海で命を落としました。

こんなことを考えると、イルカやシャチを水族館やレジャー施設に置くこと自体、人間の奢りおごのようになってしまっています。

人間は「食物連鎖」の輪から飛び出し、今や自然の管理者になった気になっています。でも人間の関わった自然は、いつか歪みゆがを見せ、崩壊へと転がっていくのではないのでしょうか。本当に救うべきは、自然や野生動物ではなく、文明という袋小路にはまり込んだ自分たちのような気がします。

普通は、こんなに簡単にシャチの群れを見られることはないそうです。一航海で、まったく逢えないこともありますし、遠くに潮吹きしか見えないことだってあると言います。シャチの群れと遭遇した^{ポッド}こと、この体験については言葉が役に立ちません。その時に撮った写真を並べておくことにします。

シャチとの遭遇の中で、もっとも印象的だったのは、子どもを守るように泳ぐシャチの家族の姿でした。シャチは海のギャングのように言われています。たしかに、シャチのハンティングは、狡猾^{こうかつ}と言えるほどに巧みでチームプレーに長けています。子連れのクジラを狙い、親子を分離させた上で、子クジラの両サイドをかため、上からもう一匹のシャチがのしかかるようにして子クジラを窒息死させる、そんな様子をテレビで見たりすると、シャチが狡猾な悪者のように思われてしまいます。

しかし反面、家族思いということでは、シャチの右に出る者はいないでしょう。クジラの仲間の中で、一夫一婦制で最後まで^{そと}添い遂げるのはシャチだけです。シャチ



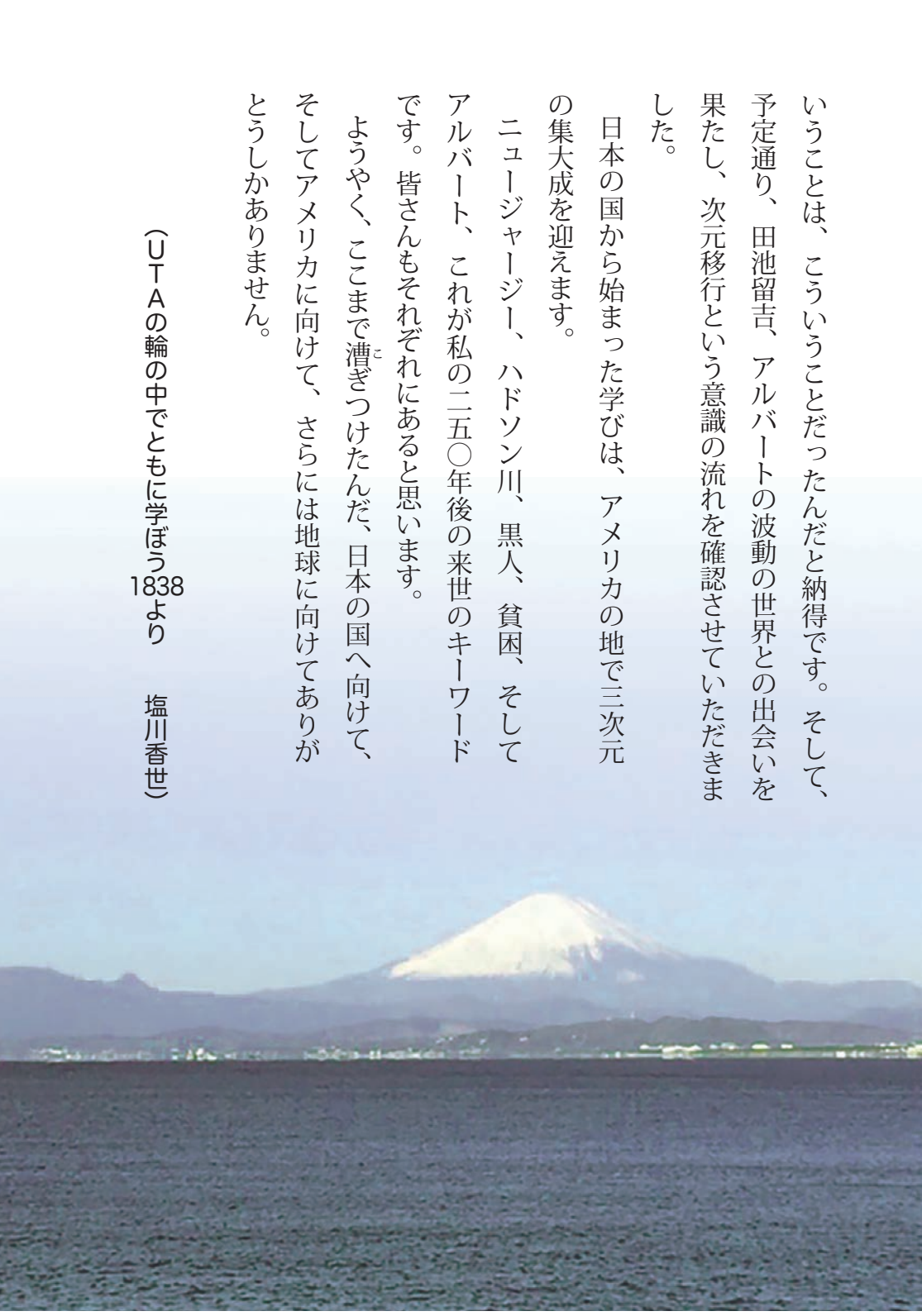
おわりに

喜んで楽しんで、今、自分を学べる時を過ごしていきましょう。どんなむごたらしい自分の世界であつてもいいんです。それをはつきりと心に感じられることが喜びです。そしてそのむごたらしいおぞましい自分の世界に、待っていてくれるからもう帰ろう、素直になつてもう帰ろう、あそこへ帰ろう、優しい優しい思いで伝えていけるなら、こんな幸せで喜びの時はないでしょう。

どんなに真つ暗闇の中に、冷たく閉ざされた中に自分を閉じ込めてきたかということ、死後の自分を思う瞑想の中で、今まず確認してください。

そして閉塞感^{へいそくかん}、重圧感のある自分の世界にほんの少しでも、隙間^{すきま}を灯りを見出してください。温もりのの中に生きていた、そこは開け放たれている、少しでもいいから、そんな世界が本当の自分の世界なんだと、今世心で知つたならば、本当に幸せだと思えます。

今世、予定通りアマテラスの国日本に肉を持ちました。大和^{やまと}は、国のまほろば……という歌が好きで、学びに集う前から、二上山を眺めながら山の辺の道を幾度も歩いてきたと



いうことは、こういうことだったんだと納得です。そして、予定通り、田池留吉、アルバートの波動の世界との出会いを果たし、次元移行という意識の流れを確認させていただきました。

日本の国から始まった学びは、アメリカの地で三次元の集大成を迎えます。

ニュージャージー、ハドソン川、黒人、貧困、そしてアルバート、これが私の二五〇年後の来世のキーワードです。皆さんもそれぞれにあると思います。

ようやく、ここまで漕ぎつけたんだ、日本の国へ向けて、そしてアメリカに向けて、さらには地球に向けてありがとうしかないありません。

日本へ

初版発行 2020年3月15日

編集 U T Aブック編集部
発行 一般社団法人U T Aブック
TEL 0745-55-8525 FAX 0745-55-8440
印刷・製本 モリモト印刷株式会社

© UTA-BOOK, Printed in Japan 2020

